

書 齋 々 々
第 三 冊
戦 合 の 朝 北 南
著 秀 俊 泉

行 設 館 蔵 本



特
3



始



特100
376.

書叢サクイ

編 三 第

南北朝の合戦

泉

俊

寿正

3. 12. 10

内交



後醍醐天皇宸影

山城國大德寺所藏

序

勤王思想の發祥する處、吾人は正義の血潮に染め
なされたる、崇高なる國民性の存在を觀る。
南北朝時代は、單に公武政戰の歴史に似たれど、其
處に亦た美はしき人道の閃めきと、忠孝の教訓と
を有す、南風常に競はずして延元陵下花徒らに寂
び、葉末に置く露の雫のみ冷かなるを感ぜしめし
は、轉た長恨の禁じ得ざるものあれど、之等の事績
が明治大業の淵源となり、國民思想の發奮を促進

すること至大なりしを想ふとき、新らしき興快を
覺ゆるものなかるべからず。
乃ち吾人は南朝の諸將士が、能く大義の爲め孤軍
奮闘せし忠勇なる事績に、多大の同情を捧げ、茲に
小著を公刊するの序を認む。

大正三年十一月

泉 俊 秀 識

(2)

例 言

- 一、本書は重に南北朝時代の戦亂を記すことにした南北朝時代は五十餘年間殆んど寧日なく全国各地に戦鬪が行はれた
- 一、即ち公武兩所屬の武士が互に合戦を爲し一勝一敗容易に終熄しなかつたのであるが本書には紙面の都合上合戦の中心點たる京畿のことのみを記した
- 一、地方に於ける公武所屬武士の對抗は郷土史の研究として地方人心を興奮さすべく有益なるものなれど今ま暫く後日を期することにした
- 一、著者は常陸に於て水戸學の精華たる勤王説を聽き兩毛の地に到つて新田足利兩氏一族の興敗と士氣を研究し奥州白河に結城氏の事績を偲び更に西下して米府に淹留すること數旬西征府の往事に關し調査する處あり越南の地に遊

(3)

んでは新田氏の敗戦と金ヶ崎灣頭に於ける南朝皇子の英靈を敬弔し河南を経て吉野に入り聊か研究を試みて居る

一、本書は量に於て少なると夫等の意味よりして著者自身には一種の追懐たるを失はぬものである

著者識

目次

其一	古武士の襟懷	一
其二	建武の中興	四
其三	兵庫の決戦	一八
其四	湊川の敗因	三〇
其五	京都の市街戦	三六
其六	主上吉野潜幸	五一
其七	四條畷の合戦	六三
其八	吉野の軍事的價值	七九

其九 武士氣質の特色
其十 兩朝時代の人物

九三

一〇四

(6)

イウサ叢書
第三篇 南北朝の合戦

泉 俊 秀 著

其一 古武士の襟懷

(一)

(1)

私は日本武士の高潔なる襟懷を、尊重憧憬するものである、歴史上に於ける日本武士の氣節に、多大の敬意を拂はんとするものである。

最近の歐米思潮が齎すものは、多くフロクマチズムのものである、功利的の思想であるが、我が古武士の氣節と、武士の高風に至つては、實に敬仰すべきものがある。

忠君愛國の血の湧き返る處は、日本國民の生命である、又た精華である、春

を飾る櫻花の美なる如く、日本民族の一特色である。

(二)

されど愛國的精神は、決して日本國民の専有ではない、歐米に於ても常に高價なる犠牲の血を流して居る、武勇も決して劣るものではない、彼等の國史は最も大膽なる、最も酷烈なる、戦争の記録なのである。

私は西洋の史書を繙く毎に、何時も歐洲の武士氣質を追想し、騎士の面影を想像するのである、彼等は詩人小説家乃至は文明史家により、羨仰嘆美の聲を以て滿されて居る、一種の特色ある武士である。

彼等の主義とする處は、多くは直往猛進にある、名を重んじ生命を輕しとする點に於て、我が國の古武士に似通ふた點が多い。それから彼等はチートン民族の特性たる、婦人を尊敬する觀念が深い、柔情剛骨並び立つの間一種の大なる氣韻を有するものは、彼等中世紀の騎士の態度である。

(2)

歐米人は愛國的精神が旺盛である、されど特別の國體を有して居る、所謂帝國主義の國は別であるが、大體に於て主上に對し絶對的忠義の行動、如何なる場合と雖、主上を無にし奉つたことのない歴史に至つては、我が國特有の美風であつて大に誇るに足ることでもある。

彼の足利尊氏は、自己の野心を満足せん爲め、屢々主上を惱まし奉つたが、猶ほ且つ後伏見帝の皇子量仁親王を奉じて帝とし、自己は征夷大將軍を以て、政權を執つたのみである。我が國民は主上を宗教的の神として拜め奉るべきものとなつて居る、之等は國民性情の美であつて、他國に比例がない、この邊の處は日本武士の美のみでなく、日本國民特有の美はしい觀念であると思ふ。

(3)

(三)

又た戰國時代の武士は、武道一遍であつて、殺伐な殘暴な人物ばかりかと思ふに、決して左様ではない、いづれも教養あり風流の嗜みがあつた。或は戰場

にあつて、敵から送つて来た矢文の和歌に感じて、追撃を止めたり、或は茶會の筵に於て、宿昔の仇怨を散じたり、矛を横たへて詩を賦するあり、會を開いて唱和するあり、一面には干戈を枕として馬の嘶きに起ち、鎧の音に眠りを醒すだけの、教養を持つて居るが、他方には風流文雅の遊びを爲し、心情の叙暢を期した。南北朝時代の武士の如き、或は講筵を開き碩學の修養談を聞き、戦陣にありて尙ほ且つ著述を爲し、大義名分の存在を明にすてふ餘裕ある高士を有した。私は日本武士の人格に就て、現代人の修養に資すべき幾多の事實を有して居る、特に南北朝時代に於ける、國士の高風の讃仰するに足るものあるを知る、南北朝時代は、日本武士の思潮の高潮期に達せんとした時代で、最も多くの悲劇的大勇者を出して居る、興味あり且つ華々しい時代である。

(4)

其二 建武中興

(一)

元弘三年五月七日、足利高氏の歸順により、六波羅は陥落し、探題南方北條時益は京都四條河原に戦死し、北方北條仲時は江州に落ち、番場に於て自殺した。而して同合戦には官軍方にては、高氏及び六條中将忠顯、赤松入道圓心等が最も忠勤を抽で、居る。次で鎌倉は同五月二十二日、新田義貞の軍勢、稻村ヶ崎より進軍し、市街攻撃を爲したから、執權北條守時は山内に戦死した、保曆間記によれば、入道高時等一族家人悉く自害すとしてある。

(5)

當時後醍醐帝は、隱岐の行宮を密かに脱し、伯耆國船上山にあり、名和長年一族が、身命を到して警備して居る。然るに官軍より味方の捷報來るや、主上には御悦びあり、同地より還幸仰出され、六月六日東寺より内裏に入り、二條左大臣道平を以て氏の長者を宣下せられ、京師のこと總て管領あるべき旨仰せ出されたのである、東守は當時朝廷の尊信なき眞言宗の本山である。

主上は京師に還幸と共に、新政を敷かれ、先づ北條氏討伐に關する論功行賞を發表された、其掛員は藤原實世、同藤房、同光繼等、相前後して局に當つて居

るが、太平記には先づ大功あるものを抽賞すべしとして、足利治部大輔高氏に、武藏、常陸、下總、同舍弟左馬頭直義は、遠江、新出左馬介義貞に、上野、播磨、同子息義顯に、越後國、同舍弟兵部少輔義助に駿河國を賜ふとしてある、而して、終始忠勤を抽でたる楠木判官正成には攝津、河内、名和伯耆守長年に、因幡、伯耆兩國を行はれけるとしてある。

大日本史料によれば、正成攝津河内守補任は、元弘三年八月五日であつて、其他の公家武家各々行賞されたが、忌憚なく云ふと建武政府の第一着手として發表した論功は、遺憾ながら公平を失したものであつた。即ち最初から王事に奔走して居つた楠木正成などより、僅か一戦により功を爲した足利高氏等が、恩賞の多かつたことである。最も楠木と足利とは既に門地家格に於て、差異があるから、楠木の方が不利益とした處で、播磨國の住人赤松入道圓心には僅か佐用莊一ヶ處を與へたるのみである。程なく所領播磨をも召し上げたから後の建武の亂には、赤松心變りし朝敵となつたと太平記の著者は論じて居る。

赤松も六波羅攻めには、相當の戦功を收めたもの、少なくとも一ヶ國位の恩賞はありたきものである、依つて北畠親房卿も正統記に「今は本所の領と云ふ所々さへ、此勳功に混ぜられて、累家もほどく其名ばかりになりぬるもあり」と云ふて居る。本領さへ論功地に混ぜられ、赤松などは後には播磨國をも取上げられてしまつたのである。

理想的新政府は、鎌倉幕府が百五十年間施行し來つた、守護、地頭制を改めて、國司を朝命し、公武の功臣をこれに補任した、斯くて兎に角中興の大業はなつた。京師は大内裏を造營し、新政府は雑訴決斷所なるものを設け、恩賞、刑罰等の事務を取扱はれ、建武元年(紀元千九百九十四年)と改元された。

恩賞部雑訴決斷所は、最初三番であつたが、事務忙劇の爲め八番となつた、委員は公卿及武士中政務に通達せる人々が選任されて居る。

一番畿内部に楠木判官の姓名がある、其他同掛官は、今出川前右府兼季、別當藤原藤房、前宰相國資、頭宮内卿經房、五條大外記頼元、武人側は宇都宮兵

部少輔公綱、土佐守藤原兼光、富部大舍人頭信連等である。

其の他新政府は、武者所を設け、新田義貞武者所頭人となりて近衛隊を總督し、參議源四家は陸奥守に任ぜられ、上野介結城宗廣と共に義良親王を奉じ奥州に下り、足利直義相模守となり、上野太守成良親王を奉じて鎌倉に居り、鎮西には二條師基太宰權帥拜命、大友、少貳、島津の諸豪と、尊良親王を奉じて居る。

足利高氏は戦功最も大なる者の一として、陛下の諱字を賜はり尊氏と改め、參議に任ぜられ、護良親王は征夷大將軍に補職された、當時専ら内政に參與したのには、吉田定房、萬里小路宣房、北畠親房等である。

楠木氏は判官であつたが清少納言は、似氣なきものとして、枕草紙に「六位の藏人、うへの判官とうちいひて、世になくらくしきものに覚え、里人げすなどは、この世の人とだに思ひたらず、目をだに見合せて、恐らわなく人の、内裏わたりの廳などに、忍びて入りふしたるこそいつきなければ」と記す。

し、また賤しげなるものとして「庭張りの車のおそひ、檢非違使の袴」と云ふことを擧げて居る、枕草紙は平安時代の見聞を、著者が印象的に記したものである、依て檢非違使の判官は如何なるものであつたか、想像される。

(二)

建武中興は名のみ美はしくして、其の實あがらず、程なく公武の政争を見るに至つた。

次で新田義貞、足利尊氏の確執が生じて來た、新田氏は鎌倉を攻め、足利氏は六波羅を陥入れ、共に建武中興の殊勳者であつた、而して何れも源氏の出である、何れも覇者たる抱負と手腕とを有して居る、到底兩雄對立は、平和を意味するものでなかつた。

尊氏の擧兵に就ては保曆間記によれば、尊氏は北條時行關東に兵を催す間、討伐の爲め建武二年七月關東に下向す、其の際征夷大將軍を乞ひしも許されず

征東將軍に任ぜられ、八月一日成良親王に征夷大將軍の宣下あり、八月三十日從二位に叙せらるゝとある。次で神皇正統記には「尊氏望む處達せずして謀叛す。十一月十日あまりにや、義貞を追討すべき由、奏状を奉ると」ある。而て兵勢に就ては梅松論に「將軍尊氏の御方には、東八ヶ國并に海道の輩一人も残す屬し奉る」と記す。義貞は斯くと知つたから、先きんすれば人を制すものとし、即ち尊氏討伐の勅許を得た。上將軍は中務卿尊良親王、義貞自から大將軍となり、諸軍勢を司令すことになつた。

義貞方の軍勢は、義貞自身が京都武者所の長官であつたから、其關係上勢ひ在京の武士及畿内西國の侍であつた。而して義貞軍は海道から進み、一方搦手の大將としては、洞院左衛門尉實世諸軍勢を指揮し、東山道から向ふことになつた。勿論兩軍共目的地は鎌倉である。

十二月以降新田、足利の兩軍先陣は、箱根、足柄、三島其他で數度の合戦があり、互に勝敗があつた。保曆間記によれば、義貞の軍勢海道を退却したから

十二月下旬尊氏兄弟、京師に打入るべく配軍すとある。尊氏は同月二十六日官職を停められた、足利勢京都攻入りの配軍は「勢多は下御所(直義)御大將、副將軍は越後守師泰、淀口は島山上總介、芋洗は吉見三河守、宇治へは將軍(尊氏)御向あるべきなり」と梅松論に記してある、また官軍の配備は、同書に京方瀨田は大將千種宰相中將、結城太田太夫判官親光、伯耆守長年なり、瀨田は正月三日より矢合せとぞ聞しとしてある、次で保曆には宇治手は足利兵衛佐向ふ、京都より楠木判官發向す、七日より九日まで合戦すとしてある、保曆は足利方を中心とした記録である。

されど同合戦は正月十日細川定禪の爲め、京軍の山崎口敗れ、(同處は洞院大納言公泰を奉じ、脇屋右衛門佐義助侍大將である)次で諸手皆な崩れ、足利の軍勢京師に進軍し來た。

神皇正統記には、丙子の春正月十日、官軍破れて、朝敵既に近づくもあり、天皇山門へ臨幸遊され、内裏を始め卿相の邸宅、結城親光、楠木正成、名和長年等の宿所も、片時の間に灰燼となつたとしてある。之れ關東軍が京師に攻め入り、處々に放火したからである。

梅松論は、建武三年正月十一日午刻に、將軍尊氏都に攻め入り、洞院公賢公の御所に御座あつたか、降參の輩註するに暇あらず、斯かりける處に、結城太田大夫判官親光が振舞こそ、誠に忠臣の義をあらはしければ、見聞く人讚ぬものなしと、大友左近貞載を、東洞院の陣所に刺殺せんとした美譚を記して居る。親光は奥州結城入道々忠の子息にて、日本武士の龜鑑となつて居る。

彼は新田義貞の軍に従ふて、鎌倉攻めに功あり、陸奥鎮守府の藩屏として決斷所にあり、足利尊氏の叛に際し、新田義貞海道發向の砌り、大友貞載駿州佐野山にて變心し、足利方に降服したからである、大友貞載は九州の豪族大友貞宗が子息であつて、元來足利源氏の餘黨であるのだが、當時は武士の向背常なき

ときでもあり旁々彼は官軍として發向し、途中變心したのであつた。

京都は十二日も引續き合戦であつた、此日官軍には奥州から源顯家が義良親王を奉じ、白河城主結城道忠を前衛司令官として、先づ江州に到着し、其由を京師に奏聞した。十四日には先陣江を渡つて坂本に進軍したから、官軍は之に力を得て優勢となつて來た、同時天臺宗徒の戦争に参加した者は、衆徒頭祐覺以下約三千人である。

關東勢は日を経るに従へ、諸國の源氏催促に應じ來るもの多く、官軍は北島新田、楠木等、濱面、三井寺等の各處に、高師直、細川定禪等と戦ふて居る。

由來京師は山國にて、要害なる如く見ゆるも、守るに比較的困難の處である。依て平家は源義仲の強襲に敗れ、義仲は源義經兄弟軍の爲めに、先づ宇治川の防禦線が敗れ、勢多口の合戦も不利となり、遂に粟津の露と消えた。又た明智光秀は山崎に、羽柴秀吉の軍勢を邀撃したが、之れも成功せず、侵入軍の爲め

に勝を制せられた。彼の保元合戦に源義朝が、京都に敗れたも、其據るべからざる地に據つた爲めではあるまいか、京師は到底戦争の地ではない、京都は東山の翠緑、西山の幽玄、共に詩境であつて戦の巷ではない、故に官軍の諸將が苦心は、何等防禦戦に効果なく、關東勢は陸續として入洛して來た。斯くて兩軍は猛烈なる遭遇戦を試みたが、京勢遂に退却したから、關東の足利軍は全部京師に進軍した。

京師に於ける合戦は、加茂川原に於ては寄手上杉禪門、京方北畠侍従の軍と戦ひ、出雲の宇佐輔景は、京方名和長年の手に屬して、七條川原に軍忠を抽んでた。

また二條川原に陣地を構へた、寄手細川定禪兄弟は、京方の大將新田義貞以下宗征の軍勢の爲めに利を失ひ、退却するの状況に陥り、高橋黨は京方洞院實世の軍勢に破れた。此の間楠木正成は、和田助康との連合軍にて、寄手島津道鑑、吉見の頼隆の軍勢に當り、其の陣地鴨河原を退却せしめた、同合戦に於ては

和田助康、舍弟同苗仲次助秀、特に軍忠を抽てた。

和田助康は、楠木一族和田氏ではない、鎌足公の末裔大中臣氏出、春日社領の御家人である。正成と終始事を共にし忠節を致して居る。

彼の家系は助康より五代前の助正、泉州大鳥郡和田に住し、其曾孫左近將監助遠、京都大番詰なり。而して助遠の孫に當る助家、元弘元年四月三日附、令旨を奉じたが、自からは病の故を以て起たづ。嫡子修理亮助康を發回せしめ、赤井河原合戦を始め、數度京都方面に、官軍の爲め軍忠を抽んで居る。左衛門藏人助氏は、助康の嫡子で、後に楠木正行の軍に屬し、四條畷に奮戦する人である。

此の舉新田義貞は、足利尊氏に對する防禦戦に、殆んど理想的の勝利を博した。尊氏義貞の親兵の爲めに追撃され、將に敗死せんとして、僅に身を以て逃るを得た位である。

其他各攻口の合戦に、足利勢敗北し山崎方面に退却し、西下の模様である。

依て主上は山門(叡山)より還幸。内裏は兵火の爲め炎上したから、前右大臣家定卿の花山院に入御あらせられた。

官軍京都防禦戦に於ける重なる人々は、洞院公泰、洞院實世、北畠顯家、六條忠顯、武士に新田義貞、楠木正成、名和長年、結城宗廣、脇屋、堀口、大館井に同一族の者である。

足利軍は海道、逢阪山等に於ける遭遇戦には勝利を得たが、京師の市街戦に大敗し、全軍總退却西下の止むなきに至つた。

依て同軍は漸次退却し始め、丹波の篠村より道を攝津兵庫にとつて敗進した。然る處へ大内長弘、厚東武實等、防長勢を以て馳せ参り來つたから、尊氏新手を以て京師を犯すべく、舍弟直義を大將とし、總軍勢十六萬騎、兵庫をたつて上洛させた。

京師にては北畠顯家、新田義貞を大將とし、其の勢十萬餘騎と、楠木正成、和泉、河内の守護として西下し、直義の軍と、西の宮濱に會戦した。

其の時の楠木軍編成は、恩地左近將監八百餘騎を以て先陣を承り、二陣は和田助家六百騎、三陣は八尾別當八百騎で控えて居る。四陣は正成自から三千騎を率ゐ、諸軍を司令し、五陣に弟同苗正氏六百騎を以て後衛して居る。而して楠木勢は豊島河原に足利勢と合戦し、敵を敗走せしめた。豊島河原は現今兵庫縣川邊郡に屬して居る。

同時細川の軍勢乃至防長の西國勢は、新田義貞の軍勢と合戦に及び、御大將細川阿波守和氏の舍弟、源藏人頼春は深手を負ひ玉ふと梅松論に記してある、官軍得意の状想ふべしである。

足利尊氏は此の舉敗北に期した、京都に破れ兵庫に破れ西走した。されど彼は武士の棟梁として、當時重望ある人氣者である、程なく西の國の武士共を語らひ、捲土重來す。

尊氏が持明院の院宣井に錦旗は、同時赤松圓心が献策により、熊野別當法橋薬師鷹を使者として京師に遣し、運動させたことである。薬師鷹は日野

中納言資名の縁者にて、勅使三寶院僧正賢俊、備後鞆の津に來りて授受されたのである。

其三 兵庫の決戦

(一)

西○攝○兵○庫○に○於○け○る○楠○公○の○忠○戦○は、楠○公○棹○尾○の○活○劇○であ○つ○て、又○た○忠○烈○な○る○國○民○性○の○發○揮○で○あ○る。梅○松○論○に○依○れ○ば、足○利○尊○氏○再○び○京○都○を○犯○さ○ん○と○し、延○元○元○年○四○月○三○日、筑○前○太○宰○府○を○出○發○上○洛○の○途○に○つ○く、此○の○行○太○宰○少○貳○賴○尙○、大○友○、島○津○の○豪○族○を○始○め、九○國○の○聲○悉○く○附○隨○す○と○あ○る。

(18)

次○で○五○月○一○日○足○利○尊○氏○以○下○の○軍○勢○は、安○藝○國○に○到○着○し、嚴○島○神○社○に○詣○で、戰捷○祈○願○造○營○料○と○し○て、金○封○を○奉○納○し、五○月○五○日○備○後○鞆○の○津○に○着○た、嚴○島○參○拜○は元○暦○年○間○源○義○經○、平○家○追○討○の○際○の○故○智○に○慣○ひ○し○も○の、源○氏○の○吉○例○で○あ○る。足○利○軍○は○鞆○の○津○に○於○て○軍○評○定○あ○り、全○軍○宗○徒○の○宿○將○の○部○署○就○中○尊○氏○同○舍○弟○直○義○の○兩

將○、共○に○軍○船○に○て○進○發○す○べ○き○や、將○た○一○將○は○軍○船○、一○將○は○陸○地○よ○り○し○海○陸○併○進○す○べ○き○や○否○に○就○て、諸○將○の○建○議○區○々○で○あ○つ○た。而○し○て○議○論○類○出○容○易○に○決○定○す○べ○き○模○樣○な○か○つ○た○が、列○座○の○將○星○中○精○悍○有○爲○の○大○宰○少○貳○賴○尙○、特○に○進○み○出○で『幸○に○兩○將○御○座○の○上○は、將○軍○(尊○氏)○は○御○船○、頭○殿○(直○義)○は○陸○地○を○御○發○向○有○べし、賴○尙○陸○地○の○先○陣○を○承○て、亡○父○妙○惠○か○遺○言○に○任○せ○て、百○ヶ○日○の○追○善○合○戰○し○て○佛○事○に○仕○ふ○べし』と、進○言○し○た○か○ら、一○座○是○れ○に○同○意○し、尊○氏○は○水○軍○直○義○は○陸○軍○に、各○大○將○と○し○發○向○し○た。賴○尙○亡○父○妙○惠○は、筑○後○守○貞○經○が○入○道○し○て○の○法○名○で○あ○つ○て妙○惠○は○尊○氏○西○下○の○際○大○宰○府○の○館○に○招○し、官○軍○、菊○池○、秋○月○勢○と○合○戰○に○及○び、遂○に○同○處○有○智○山○に○戰○死○し○た○る○老○勇○士○で○あ○る。賴○尙○當○時○の○遺○言○に○基○き、吊○合○戰○せ○ん○と○意○氣○込○ん○で○居○る○の○で○あ○る、妙○惠○の○遺○言○に○は『追○善○更○に○無○用○宜○敷○一○族○心○を○一○に○し○て○將○軍○に○忠○節○を○盡○べし、是○れ○百○萬○の○經○陀○羅○尼○の○供○養○に○も○勝○る○と○存○べし』と○あ○る、以○て○當○時○の○武○士○氣○質○を○窺○知○す○る○こ○と○が○出○來○る。何○と○な○れ○ば○武○士○は○將○軍○の○馬○前○に○死○す○る○を○以○て、無○上○の○光○榮○と○し、尊○氏○に○盡○す○は○即○ち『忠○節』と○信○じ○居○つ○た

(19)

からである。特に甚しきは武家方の代表とも見るべき梅松論は、官軍新田義貞を『凶徒』と記し得意がつて居る、時代思潮の一端之によつても知らるべきである。

斯くて足利軍は、大宰少貳頼尙が献策により、尊氏は兵船にて、直義は陸地より併進す、水軍は執事高師直侍大將の首班にあり。陸軍は高越後守師泰總參謀長にて、大宰少貳頼尙は先陣である、陸地より進む軍勢、約三十萬騎、五月十五日備前の兒島に着し、内外の形勢を窺ふて居る。同時尊氏の水軍は更に四國勢、細川、土岐、河野を加へ、室の泊に投錨勢威既に天下を呑むの概あり。依て新田義貞の西下軍は、播磨白旗城の圍みを捨て退却した、當時京畿には足利方、石堂義慶、畠山國清、紀泉を、今川頼貞、仁木頼章等兩丹地方を徇へ、遙に尊氏の上洛軍と氣脈を通ず、官軍高倉少將の軍勢出動したけれど、餘り戦局には變化はなかつた。

(二)

足利勢大舉入洛の趣きは、兵庫在陣の西下軍司令官新田義貞の奏聞により叙聞に達した、主上大に御騒ぎあり、即ち義貞への援軍として、楠木判官急ぎ兵庫へ下向し、義貞と協力防戦すべき旨勅宣を下された。

正成長り『足利勢筑紫九國の精兵を以て上洛候なれば、味方の疲勞せる小勢にては、必捷豫期し難し、依て新田朝臣をも京師へ召し歸し候て、前の如く山門へ臨幸なし給はゞ、正成自からは河内に下り、敵の糧道を斷ち、義貞朝臣山門より打ち出で、朝敵を一戦に滅亡候べし』と具陳した。由來京師の糧道は淀川水運によるもの多い、故に同糧秣線を遮斷せらるゝことは、寄手の最も苦痛とする處である。正成攝河の守護として、足利の同線を襲はんと献言した、義貞朝臣山門よりの出動は、前市街戦に奏功して居るからである。

然るに坊門宰相清忠、征罰の爲めの節度使、未だ戦をせざる前、帝都を捨て

山門へ臨幸然るべからず、正成兵庫へ下向すべしとあつたから、正成は手兵と共に京師を發向した、この事に就ては坊門清忠は長袖者にてありながら、軍事にまで干渉するが故に、正成遂に討死するに至れりと、清忠を惡様に云ふ者多いが、然し其の場合、出來得れば兵庫に於て、一大防禦戦をなし、而して該處に敵軍を拒止したきは、時の朝廷の意向ばかりでなく、官軍の輿論であつたらうと思ふ、即ち坊門清忠勸言一番、官軍の奮起を促したるもので、兵庫に於ける防禦戦は、當時官軍の總司令官新田義貞も同意する處であつた。

正成は五月十六日京都を立ち、兵庫の防禦陣地向ふ。坊門清忠と私見を異にしたる爲め、遂に同處に於て討死したりと解説するものあるも、正成は決して一私見の採用せられざりしを憤り、責任ある生命を猥りに致す程、不忠實の人にあらず。湊河戦死は楠公が最善を盡したる上のことである。

正成發向に際しての状況は、河内觀心寺瀧覺房聖瑜に宛てたる書信により、其の真相を知ることが出来る、即ち五月十六日附の一節に「馳向兵庫可致防

戰之旨勅宣甚以急也」と京師の模様を書し、更に「情傾軍慮度之官軍微卒而何豈當於大敵矣」と當時の軍況に及んで居る。而して公の處決は「依數雖諫奏君嘗無御許容空垂淚痕今日發京師赴戰場」とあれば、其間既に是非なきを知ることが出来る。若し夫れ「命懸養由矢前義比紀信忠欲致戰死之條無他事」に至つては、公が至忠至誠を披瀝せるもの、親書は往々其の人の人格を、赤裸々に物語る、公にして始めてのこの響きあるべきものと信ぜらる。

(三)

斯くて五月二十四日、正成兵庫に至り義貞と對面あり。陣中數杯を傾けて通夜對談す、敗軍の小勢を以て、機を得たる敵の大軍に當る、能し兩將の胸中既に成算ありとするも、一片の同情なきを得ぬ。梅松論は更に當時の消息として正成兵庫下向の途、新田義貞を討伐し、足利尊氏を朝廷に召し歸されたき旨、獻言したりとあれど、正成ともあらう者が、尊氏の勢力を恐れ、俄かに義貞討

伐を献言すべき筈なし、梅松論所載は尊氏の人氣を誇示すべき足利政府の手段と思ふ、依て既に大日本史は本記事を削除して居る。尊氏の水軍は同日兵船大小三千隻、薄暮播磨大藏谷沖に投錨同處に於て官軍新田義貞、兵庫に防戦すべふ報を得て水陸の配軍をした、先づ陸地より進軍する者は「大手は下御所直義副將軍は越後守師泰（梅松論）」とある。次で山手より「大將尾張守高經、安周防、長門の守護、厚東井に軍勢共」進軍し、全軍意氣軒昂無敵の概がある。而して濱手の街道よりは、大將大宰少貳頼尙並同一族の分國、筑前、豊前、肥前、山鹿、麻生、薩摩の輩等進軍し、勢ひ甚だ猛烈なるか、尙ほ水軍は總大將足利尊氏、侍大將高武藏守師直以下、舟師約二十萬、陸地の三手合せて三十萬騎と相呼應し、須磨海峡を直進した、實に天地も震撼せんばかりの光景である。

同時官軍の配備は、總大將新田義貞、本陣を兵庫羽坂通二本松（現兵庫停車場附近）に置き、傍ら前哨部隊を和田岬小松原に出し、中黒の旗を颯々たる濱

風に打靡かし防備を嚴にす。中院中將源定平の軍勢も亦た同方面にあつたが、一方經島（兵庫の川口町附近）には、脇屋右衛門佐義助大將として、一族二十餘人士卒五千餘騎と共に、敵の到來を待ち、燈臺臺南の濱手には、大將大館左馬助氏明一族十餘人士卒三千を以て備ふ。其の際楠木正成は、約七百の精兵を以て、會下山より富田山に亘る天險に陣を敷き、菊水の大旗小旗を山風に打靡かし、湊川の里まで楯を並て備へ居た、會下山は舊湊川後方にあり。敵の進入軍を扼止するには、最も地の利を得たる處である。楠木の前哨部隊は、部將志貴右衛門以下士卒約三百、播磨街道の須磨口に進軍し、二陣は舍弟正季二百騎を以て備へて居る、當時正成は残れる二百の士卒と共に本陣にあり。足利直義の軍勢中明石より鹽屋に出で、須磨上野に來るものと、多井畑村より妙法寺村に出で、長田村に來るものと、及び背面夢野村より襲來するものに備ふ。

官軍總大將新田義貞、正成に向ひ卿が軍勢僅か七百内外の小勢なれば、宇都宮、千葉、菊池の軍勢を附せんと傳騎を走らせたが、正成は之れを辭し専ら手

兵を以て防備を勤めて居つた。

(四)

兵庫の合戦は梅松論に「將軍(尊氏)の御座船は、錦の旗に日を出して、天照大神、八幡大菩薩と、金の文字に打て付られたりければ、日に輝きてきらめきたり」としてある、五月二十五日未明、海上の船は帆を下して磯近く漕ぎ寄せ陸地の諸軍勢は旗を進めて相近づく。兩軍太鼓を鳴し鬨の聲を揚ぐ。楯の端を鳴し胡蝶を敲き戰機彌々近づく、官軍相模國住人、本間孫四郎重氏、黄鹿毛の駒に、紅裾濃の鎧着て唯た一騎、小松原新田が陣頭に現はれ、上差の流鏑矢、二所藤の弓の握り太なるを、遠矢として足利の水陣に送る。これを合戦の始めとし、全軍戰鬪開始、足利の先登、佐々木筑前守顯信、經島に脇屋右衛門佐義助と戦つて敗退した。然るに足利の水軍は、先登佐々木顯信、經島に破る、や細川卿公定禪、紺部の濱より上陸せん形勢である、官軍二萬餘騎、敵を上陸さ

せじと、船を追ふて東行す。足利勢陸地は三道より併進し、更に水軍をして官軍の腹背を突かんとしたるもの、義貞の軍勢東行する敵の兵船を追ひ行く程に海岸の戦線のみ長大となり、正成の軍と連絡を失ふに至つた。元來敵の水軍に備ふべく、官軍に一隊の水軍なかりしことは、官軍の爲め甚だ不利とする處である、出來得べくんば、敵の水軍は少なくとも須磨海峡に扼止すべかりしものである、それに其の事官軍は不能である、依て足利の水軍は、同處及び西の宮濱より上陸した、足利の水軍は重に九州より供奉の輩并に四國勢である。

さばれ陸軍の戦況は如何と云ふに、濱手の先陣は大將太宰少貳頼尙が一族にて、武藤豊前次郎頼村、同對馬小次郎頼義、旗本の士二千餘騎と、新田が小松原陣を突撃す。激戦數合敵氣鋭にして當るべからざるものがある、即ち新田勢生田森方面に退却した。又た足利の中央軍、直義の第一陣赤松信濃守範貞は、楠木が前哨部隊志貴右衛門と須磨口に激闘し、暫時にして敗退した、直義の第二陣は九州大友が軍勢である。

同時楠木正成は會下山の本陣にあり。諸軍の情報を綜合し、舍弟正季に云ふやう、「敵は兵庫に上陸して背を遮りたれば、御方は陣を隔てたり、先づ前なる敵を一散に追ひまくり、而して後なる敵に當らん」と、舍弟正季其の意を含み、手兵と共に大手に向ふたのである。

(五)

直義の第二陣大友貞宗が軍勢は、志貴右衛門の軍勢と合戦中である。志貴軍奮戦し寄手大に惱む。正成即ち此の機逸すべからずと、自から部將を督勵し、長田村に大將足利直義の本陣を衝く。直義陣頭に立ち、全軍を叱咤指揮すれど楠木軍は楠木正季、南江正忠、宇佐美正安、和田正隆等奮戦容易に屈せず。大將直義既に討たれぬべく危かりしを、薬師寺次郎公義、直義が馬前に楠木勢を防ぐ、其の間直義須磨の上野に退却した。同會戦は少なくとも正成得意の一とするもの、直義兵數に於ては正成に十數倍せしも、決死の精兵には敵し難く、一

時退却するの止むなきに立ち至つた。太平記は楠木勢追撃すること急なり、正成舍弟正季、直義を得んとして陣中を往來し、七度遇へて七度分ると記す、以て其の激烈なりし戦況を概知するに足る。時に和田岬の胸が林より上陸したる總大將足利尊氏、舍弟直義の形勢危機に迫りし由情報に接するや、高、上杉、島津、仁木、吉良、石堂の宿將をして、其の勢六千餘騎、湊川の東土堤に馳せ向はしめ、正成の背陣に迫つた、正成丘陵に上り、兵を整ひ四方を下瞰す、南和田は既に尊氏の軍兵充滿し、將に湊川陣を襲はん形勢である、東生田は味方の總大將新田義貞、軍を収めて退却せん有様にて、寄手の搦手高尾張守高經の軍勢并に厚東武實以下の防長勢は、既に湊川陣の腹部を衝く陣形である。特に直義の軍勢も機を得て攻勢に轉じたれば、正成今まは全く包圍の悲境にあり、新田勢との連繫も既に絶えたれば、有繋の楠木勢も、最早一方に血路を求め外萬策なくなつた。

斯かる折りしも兵庫紺部に上陸し新田の前哨部隊を走らしたる、細川卿公定

禪、同帶刀直俊を始め、新見野、古山、杉田、宇佐美の軍勢直義の中央軍に參加し奮戦した。加ふるに足利尊氏、高高經、少貳頼尙、鳥津道鑑等の司令する各軍に狹撃されたれば、楠木軍の宿將等相前後して亂軍中に討死し、梅松論は兩軍の激闘十數合の上『申の終に正成并に舍弟七郎左衛門以下一處に自害する輩三百人』に及びりと記して居る。又た『是程の激戦なれば味方(足利)にも討死手負多かりけり』とあり、其の戦狀の痛烈であつたことが知れる。特に正成午前八時より午後二時の討死時に至る間約六時間に十六回の遭遇戦を續けたりとあれば、如何に奮戦せしかを想像するに餘りあるものである。

其四 湊川の敗因

(一)

正成同一族討死の様様は、諸書に記しあるものを綜合するに、戦闘既に盡き

(3)

る頃、尊氏密かに道を開き、正成の爲め活路を與へんとしたるが、正成期する處あり、即ち其の好意を斥け、湊川在家の一村に入り、心靜かに割腹せんと、鎧を脱き我が身を見るに、斬疵十一ヶ處あり、其他正季以下一族宗徒の生存者七十三人、何れも五ヶ處三ヶ處の疵を被らぬ者なし、依て今まは是迄なりと、正成舍弟正季に最期の極みの思出を問ふ。正季『七生まで只同じ人間に生れて朝敵を滅さばやとこそ存候へ』と申す、正成是を聞き『世に罪業深きことながら、吾れも斯く思ふなり』と兄弟差し違ひて同じ枕に伏したとある。該話説は太平記作者か、正成同正季の至誠至忠を、想化したるものなれど、兎に角正成は日本忠臣の典型として崇拜され、正季の七生報國は、國民の守り本尊たる觀がある。一説に正成割腹の場所は、會下山下通説『楠寺』とも云ふ。之は明極和尚行狀に、『正成終入當寺之無爲庵而昆季列座自殺、殉死者千人、禪師速入庵中、函遺骸避庵百弓許葬焉』とあるからである、正成割腹後、一族下部七十三人同處に自殺す。同合戦正成甥楠木彌四郎政成、播州廣峰別當昌俊と戦ふ

(31)

て討死した、正成首級は搦手大將一高尾張守高經の手の者討ち取りし間實檢あり、まきるべきにあらす哀れなるかな』と尊氏云ふ。尊氏も正成の至誠には感動せし點があつたのである。同合戦に討死した楠木一族は、判官正成、同左衛門尉正季、和田彌五郎正隆、橋本八郎正員、宇佐美河内守正安、南江備前守正忠、伊藤兵部義和、惠美太郎正遠、矢尾新介正春、新宮寺兵衛正師等であつて新田軍の戦死者は江田高次、安田正光、富田正武、和田重房、河原正次、三石行隆、箕浦朝房、石井末忠、岡田友治、菊池武吉等である。又た足利軍の戦死者は宗右馬頭頼茂、石川七郎兼光、彦部七郎光貞等にて、足利方の記録によれば、味方の討死負傷非常に多かつたと云ふことが記してある。

(32)

(一)

湊川合戦は以上の如く、兩軍に多數の戦死者を出させた。就て楠木軍湊河戦の経過は、正成最初大手の軍を撃破すべき決心にて、足利直義の軍勢に向ふ。

第一戦は正成計畫の如く、直義軍を須磨上野にまで退却させたも、足利尊氏の水軍、高、上杉上陸し、正成の背後を襲ふて直義に應援し、次で九州の小貳島津、四國の細川勢並に搦手より高經の軍勢に殺倒され、四方に敵を得た、如何に神出鬼没の正成と雖も、斯くては到抵勝ち味なし。特に陰曆五月二十五日のことなれば、早や初夏の候にて暑氣を覺ゆること甚だし、正成以下朝來より十數合の合戦に、神心共に疲勞したると、數ヶ所の負傷の苦痛に堪えず、遂に討死したるものと信ぜられる、最も本稿を起すの時、河内天野(同地方は楠公の根據地たりし處)の一人は、楠公は實は湊川に討死せず、同處を逃れて河内に歸り、再舉を圖られたるも、不幸戦傷の爲め、遂に東條城に病歿せりと云ふ。現に同地方には斯かる口碑も傳はれる由なれど信するに足らず、湊川戦死は楠公の花なり、正成よし再舉を圖るべく河内に入り、同處に病没したりとすも、公が忠誠の行動に關しては、何等の輕重なし。依て口碑は往々眞實を傳ふることあれど、未だ俄かに雷同し得ず、正成は湊川に於て、確かに討死せし

(33)

ものと信ず。梅松論には首實檢の章あり、太平記には正成の首級を千早城に送るの條あり、『大日本史』以下何れも正成の討死には、疑を有せざる處を見ても知らる。尊氏同二十六日附、少貳頼尙副書にて、在九州仁木義長に與ふる書に「昨二十五日兵庫島の合戦に於て楠木判官正成を討ち取り了る」と記せし如き、其の有力なる證據の一である。

(三)

兵庫合戦は既に記せし如く、官軍に一隊の水軍なかりしことは一大敗因なりと信ず、當時若し官軍に有力なる水軍の一隊あらば、尊氏の率ゆる水軍を、須磨海峡に扼し、以東に進出せしめなかつたのである。

最も當時の水軍は、其程度現今の海軍なるものとは甚たしき徑庭を有するものなるが、敵にありて官軍に其編成なかりしは遺憾事である、故に當時官軍に一隊の水軍あり、敵の水軍と合戦に及ばば、新田軍は一時和田岬を退却せしに

せよ、楠木軍は直義の中軍を走らせたり、例令搦手より尾張守高經進軍すと雖も、未だ俄かに勝敗を決すべきにあらざりしならむと思考せらる。

其五 京師の市街戦

(一)

それから兵庫の合戦に於て、最も同情すべきは、軍司令官新田義貞である、彼は武將としては、殆んど理想的の好將軍である、人心を收攬する點に於て、足利尊氏程でなかつたか、有鑿は官軍の總司令官を命ぜられる人ほどあつて、戦術と謂ひ兵法と謂ひ、誠に堂々たるものであつた。正成は千早合戦以來、奇策を以て屢々敵兵を惱まして居るが、其作戦の基礎は極めて小規模である、忠誠なる點に於て正成は第一人であるか、人物としては義貞の方が、更に大きかつたやうに思はれる、兵庫の合戦に於ても正成は戦はずして、退却せんことを

主張したが、義貞は責任上同處に於て一大決戦を爲し、敗れて後退却するも遅くないことを主張した。同處の戦は、敵味方の士氣に非常なる差異がある、官軍は一般に不振であつたのに、西上して来た足利勢は、意氣衝天の概あるものゝみであつた、其點に於て彼が苦戦したことは、楠公の忠死と共に、大に讀者の注意を促したものである。

さて楠木判官湊川に戦死したれば、足利尊氏と同直義とは水陸の聯合軍を以て、總大将新田左中將義貞の陣に肉薄して来た、義貞は一時退却したが、足利兄弟と潔く決戦せんものと、生田森を背面に負ひ、其軍勢四萬餘騎、各將卒をして部署に就かしめた。

先づ先陣は剛勇の者たらざるべからずと、大館左馬助氏明、江田兵部大輔行義に、三千餘騎の兵を率ゐさせ、仁木頼章、細川定禪が六萬餘騎の軍兵に向はしめ、二陣は中院中將源定平、大江田、里見等五千騎をして高師直が八萬騎の大軍勢に當らしめた、三陣は脇屋右衛門佐、宇都宮治部大輔、菊池、土居等約

一萬騎にて、左馬頭直義、吉良、石堂の十萬騎に當り、互に火花を散して決戦した。同時兵數に於ては、新田勢は足利方に比し、絶體の少數なれど、彼に訓育された、士卒は最も勇敢なるものゝみである、激戦十餘合、未だ俄かに勝敗の決を見ることは出来なかつたが、足利方が退却しかけたので、義貞は追撃戦に移つた、軍勢實に二萬三千騎、足利の三十萬騎と合戦を持續した。太平記によれば、官軍の總大将たる新田左中將と、武家の上將軍たる足利尊氏と、自から戦ふ軍なれば、射落さるれど、矢を抜くに隙なく、組み下になれど落合ひで助くるものなし、只た子は親を棄て、切合ひ郎等は主に離れて戦へば、馬の馳せ違ふ聲、太刀の鐔音、如何なる修羅の闘争も、之には過ぎしと夥しく記してある。

特に合戦酣となるや、義貞は兵力を集注し、専ら足利方の主力を撃破せんと四隊の陣を合して太刀計ちを開始した。義貞は兵の統帥には餘程妙を得て居る四隊の軍勢を最も巧みに運用して、足利勢を惱ましたが、足利勢は關東及び九

州の足利源氏に關係を有して居る武士のみである、源氏の武士は精神的強くなければならぬものとされて居る、常に父兄により剛勇なる物語を聽き、吾等の祖先は何れも強いものであつた、其父兄の名を汚すと云ふことは、武士の恥辱である、精悍に奮戦した。新田の親兵は、重に關東から附隨して來たものであるから、鎌倉の市街戦を始めとし、非常に勇敢なる行動をして居るが、元來官軍は兵數が少なく、特に友軍たる楠木の軍勢が、敗戦したから、如何に義貞は智勇兼備の大將と雖も、潮の如く攻め來る、足利勢を撃退さすべく不利となつて來た、義貞は大館左馬助に一隊の親兵を率ゐしめ、猛烈なる突破戦を試みさせたが、何等奏効を見るに至らなかつた、依て脇屋右衛門佐、宇都宮治部大輔の軍勢に、後備をさせて足利勢の追撃を扼止させ、義貞は總軍勢五千餘騎を以て生田森の東方より、丹波路に入り、軍を退却させたのである。

(二)

然るに足利勢は、勝に乗じて是を追撃することが益々急である、義貞は如何にもして味方の軍勢を退却せしめんと、自から後陣に止りて、防衛軍を指揮し返し合せて戦ふたから、義貞の乗馬は敵の矢七筋射立てられ、遂に求め塚の附近に於て斃れてしまつた、されば義貞は乗り換の馬を求むべく、此處の林中に憩ふて居ると、小山田太郎高家は遙かに之を見て、己が乗り料に義貞を乗せ、追撃し來る敵勢を防ぎ、義貞を落ちさせたのである。而して高家は同處を死守したから、義貞の軍勢は退却することが出來たので、高家は同處に討死したが、非常に勇壯なる戦闘を續た勇士である。

義貞は始め丹波路を経て、京師に軍を返さんとしたのであるが、丹波には今川頼貞の軍勢守備して居る、足利勢は比較的優勢である、依て丹波路にも深く軍を進むることが出來ぬ、故に義貞は更に池田の方面から京街道に出で、山崎を通過して京都に入つた。神護寺文書、鞍馬寺文書等によれば、足利の追撃兵は、京師を包圍せんと各道から進軍したことが記されてある、同時に鞍馬寺の

寺僧等も、足利勢防禦の繪旨を受けて居る。

梅松論には翌五月二十六日、尊氏は兵庫を立つて本陣を西宮に進めらるとしてある、即ち足利の陣が、西の宮に前進したので、兵庫には弟直義が止まり、首級實檢其他庶務を取扱ふた。公卿補任には二十六日に『西國の軍勢、山崎寶寺に到る』としてある、足利勢の追撃軍指揮官は、細川定禪であつて、義貞の退却に際し、芥河附近で、官軍三十餘人を捕虜として居る。足利の追撃軍は、義貞の軍勢を追撃すると共に、別働隊を組織し、楠木が殘兵の退却をも追撃させた。楠木が軍勢は、湊川の戦に全部戦死したやうに傳へられて居るが、實は多少の殘兵あり、河内守護代大塚掃部介惟正の指揮により、一と先づ八木入道法達が泉州八木城に入つた、八木法達は楠木宿將の一であり、兵庫の役に從軍して居る、八木城は和泉の守護島山國清、之を攻圍したが、楠木一族の橋本左衛門尉正茂が河内より來りしと、京より中院中將定平が來援したので、程なく圍も解け楠木殘兵は、苦戦の上河内の東條城に入つた。

(三)

京師にては新田義貞兵庫に敗れ、楠木正成討死の報を得て上下震駭し、主上は叡山に行幸仰出された。

次で丹波より仁木兵部大輔頼章、今川駿河守頼貞の軍勢、洛中に攻め來り、尊氏は五月二十九日八幡山に本陣を定められた『去春九州下向の際同行せざりし武士悉く降参す』と梅松論にあり、足利勢は益々優勢である。

官軍は山上の天嶮を利用し、坂本に討つて出で、敵を撃攘せんとして居る、六月五日細川定禪の先鋒と、西坂本に激戦あり、恒良親王の副將軍千種宰相中將忠顯同處に討死し、防門少將雅忠諸軍を指揮された。されど追手には吉良、石堂を大將とし、其勢五萬餘騎、又た搦手には仁木、細川を大將とし、四國九州勢八萬餘騎、西阪本には高豊前守師重、高土佐守師秋、高伊豫守重成等を大將とせる、卅萬騎の大部隊が攻勢を執つて居る、足利直義は赤山に本陣を置き

諸軍を司令して居る。

それから六月一日のことであつた、細川定禪は四國勢を以て、内野に陣をとり、高師直は關東勢を率ゐて、法成寺河原に陣を構へた。依て新田義貞は大宮猪熊に出動し、所在火を放ちて、八條坊門まで進軍した、然るに尊氏の本陣危しとあつて、直義自から防戦すべく陣頭にたゝれたが、綾小路の官廳壬生匡遠が宿館にあつた、太宰少貳頼尙之を見て、東寺の本陣を援くべく出動した、官軍大宮口には新田義貞進み、猪熊は名和伯耆守長年の軍勢である、足利方は仁木兵部大輔頼章、上杉伊豆守重能を始め、細川、少貳の軍勢奮戦したから、名和長年は同處に討死してしまつた。

(42)

其他宇治手には四條隆邦の軍勢、細川源藏人頼春の軍勢と戦ひ、竹田街道よりは今川駿河守頼貞大將として、進軍し來り、楠木一族の和田正遠等河泉の兵を以て防戦した。之れを要するに義貞が内野より、尊氏の本陣を襲撃すべく京都に攻め入り、不成功に終つたが、足利方も非常に苦戦し、僅かに山名、土岐

の軍兵が、鴨川原に戦線を開展したので、法性寺近邊に防ぎ得たと云ふだけである、同時近江には小笠原貞宗の軍勢到着し居りしも、脇屋義助の軍勢に阻止され、入浴することが出来なかつた。六月十四日尊氏は八幡を發し、途中大渡赤井河原に官軍を撃破し東寺に入り、上皇親王並に梶井大覺寺兩法親王、執柄左大臣近衛經忠等を迎へ、灌頂堂を以て御所とした。

官軍は十九日四條中將隆邦を大將とし、和佐源秀、岸和田治氏等、竹田河原に打つて出で、高越後守師泰等の軍勢を烏羽街道に撃退した、二十日今道越の合戦には官軍優勢にて足利方の高豊前守師重戦死し、陸奥の石川義光等討死して居る。直義は味方の形勢不利なるより、赤山の本陣は無益なりとて、同處を撤退し、洛中の三條坊門邸に退却したから、山門の包圍は解かれた。依て官軍は二十六日未明を以て、新中納言堀川光繼を大將とし、鞍馬寺の衆徒並に義貞の配下に屬す、宇佐美政泰等をして、加茂河原に敵を逆襲し、足利に對す關東の援軍をば、四條隆邦をして宇治木幡方面に防がしめ、三位中將源彦良を大將

(43)

として、丹波口の敵を撃攘せしめた。其他京師を中心とした、同地附近一帯は軍兵を以て満されて居つたが、官軍は必死となつて防戦したから、足利兄弟も暫く持久の計を立てんと、東寺を以て城郭と爲し、總本陣に定め、三條坊門邸を直義の本陣とした。同時軍務を司つたのは、三條坊門の邸であつて、堀川中納言光繼の指揮せる官軍は、屢々同處に夜襲を試みた。

(四)

京都の合戦は兩軍の勝敗容易に決せず、梅松論によれば、八月二十八日義貞等の官軍は最後の合戦を爲すべしと、錦旗を出して決戦の意を示し、足利方の總大將高師直と合戦したが、之れも一勝一敗の有様であつた。其内官軍も餘り有利でなく、足利方から媾和の申込みがあつたので、義貞等は絶體的反對意見を持して居つたが、遂に媾和が成立した、正統記には主上「十月十日の頃にや山門より還幸いと淺ましき事どもなり」と記してある、表面は尊氏よりは媾和

申込みなれど、實は官軍の守備窮蹙したからであつて、露骨に云へば官軍の爲め、決して有利な媾和ではなかつたのである。

依て官軍中には還幸の供奉をした者と、他に没落して新行動を計畫するものとがあつた。義貞は今更ら降虜となることは武士の潔しとせざる處であると北畠親房卿、四條隆資卿等と圖り、密かに皇太子尊良親王を奉じ越前に落ちたのである、同時主上還幸に供奉した人々は、吉田内大臣定房、萬里小路定房、侍從中納言源公明等の公卿を始め、大館左馬助氏明、江田兵部少輔行義、宇都宮公綱、菊池武俊等にて、北國に没落せしは尊良親王、洞院左衛門實世、洞院少將定世、三條侍從泰季等にて、新田左中將義貞並に同一族等都合七千餘騎であつた。同時妙法院宮は遠江國に、阿曾宮は大和に、四條中納言は紀伊に、中院中將は河内に入り、所在の官軍を糾合し、再舉を圖つたのである。

同十一日義貞は、内々勅を蒙り近江より越前に入り、鹽津海津に着かれたが斯くと知つたる越前守護高尾張守高經は、之と防戦すべく配備したから、義貞

は軍を敦賀郡荒茅の山中に進めた、然るに同處に於て義貞の軍勢は、大雪に逢ふて凍死する者多く、非常の苦境に陥つたのである。即ち北國の習ひとて、陰曆十月の初めよりは、高き峰々に雪降りて、麓の時雨止むときなく、殊に寒氣強ければ、士卒進軍することを得ず、千葉介貞胤は五百騎を以て、先陣を承つたが、東西くれて降る雪に道を踏み迷ひ、進退度を失ひ遂に自害せんとしたが、尾張守高經の使者來り、勸降したれば、心ならずも降參して高經の手に屬し、河野、土居、得能等三百騎の後陣は、佐々木一族に取り圍まれ、木目峠に自刃した。其年は例年よりも陰寒早くして、風交りの山路の雪、鎧の袖に洒くこと烈しかりければ、士卒寒谷に道を失ひ、適火を求めど暮山に宿なく、弓矢を折り焼きて薪とし、僅かに暖を取ると云ふ有様で、糧秣の準備少なきより乗馬は多く凍へ死んで、一行は悲惨の限りを盡したが、義貞は何處までも勇壯に、萬難を排して進軍し、眞に日本武士の眞價を發揮したのである。十三日に至り一行は敦賀に着き、氣比神宮司の氣比彌三郎太夫氏治に迎へられ、金崎城に入つ

た、而して同處に於て先づ再舉を圖らんと、子息越後守義顯に、北國勢二千餘騎を附し、越後國に向はしめ、脇屋右衛門佐義助には、千餘騎を附して、爪生保が柚山城に到らしめ、官軍の爲め奮起を慫慂したのである。

(五)

十四日未明に義助と義顯とは、三千騎を引率して、敦賀を出發し柚山城に入つた、城將瓜生判官保、弟兵庫助重、同彈正左衛門照等、酒肴を調理して兩大將を鯖並の宿に迎へ、歡待到らざるなしと云ふ有様であつた。然るに同地の守護高尾張守の使者が、義貞一族を追討すべき綸旨を送達して來たから、判官保は俄かに心變じ、柚山城に籠城してしまつた。同時に判官の舍弟に義鑑房と云ふ禪僧がある、鯖並の宿館に來つて『兄なる保は將軍よりの綸旨を誠と信じ、忽ち違反の志を現はした、誠に口惜しき限りであるが、保とても事の由を疾と承はつたならば、或は御味方仕らぬと云ふこともあるまい、就ては御幼稚の御

公達を義鑑御隠まい申し、時を待つて御旗を擧げ金崎城の後詰めを仕るべし』と涙ながらに申述べたから、義助も其氣色を御覽あり、偽りはよもあるまいと、潜に別室に招き『主上坂本を御出ありしとき、尊氏強ひて申すことにより、己むを得ずして義貞追討の繪旨を發せられたものと思はれる、之は嘗て主上が義貞に向はれ、汝かりにも朝敵となり、汚名をとらんこと然るべからず、春宮に位を譲り奉りて、萬乗の政を任せ進らるべし、義貞股肱の臣として、王業再び本に復するやう大功を致せと仰せ下され、三種の神器を春宮に渡されし上は、例令先帝の繪旨なりと尊氏申したればとて、思慮あらん人は眞とは思はざるべし、然し判官是非に迷ひ去就を決する能はざれば重れて仔細に及ばず、唯だ御身の御心中たのもしく覺ゆれば、幼稚の息男義治を御預け致すべし』と、年十三歳なる式部太夫義治を義鑑房に預けられた、鐘愛他に異なる幼少なる一子なれば、義助は恩愛の情禁じ得ざるものがあつたが、義の爲め敵中に留め置き夜明けを待つて一と先づ金崎城に引き返すことになつたのである。

兩將は船にて敦賀に着せんと、鯖並の宿より便船したが爰に今庄の住人なる今庄九郎入道淨慶と云ふのがある、官軍の落人多く來れりと聞き、近在の野伏共を催し集めて、險岨なる鹿塞を設け、鐵を揃へて待ちかまへて居る。大將義助は之を御覽あり、何様今庄の者なれば、法眼久經と云ひしもの、官軍に屬し坂本の合戦に参加したることあれば、或はその一族ともにやあらん、其者なればさすがに舊功を忘れまじと覺ゆ、誰れか行きて事の由を尋ねよとあつたから由良越前守光氏は軍使として只だ一騎駒を進めて、大音聲にて『脇屋右衛門助殿合戦の評定に付、柚屋の城より金崎へ越され給ふなり、旁々存知なき爲め、斯様に道を塞がれ候やらん、若し一矢筋をも射出されなば、何處に身を置きて罪科を遁れんとし玉ふぞ、早く弓を伏せ胃を脱ぎて通し候へ』と申入るれば、今庄入道は馬より下り、『親にて候法眼久經は、御手に屬して軍忠を致し、御恩の程辱なけれど、淨慶父子各別の身となりて、尾張守殿の手に屬したれば、此處を支へ申さずして通すこと、其罪科遁れ難きに似たり、されば態と一矢仕

るなり、之れ全く本意なられど、又た己むを得ざる仕合にて候、あはれ御供仕
 候士卒の内にて、相當名ある人の首を受け、其首を合戦仕りたる支證と爲し
 御一行を御通し仕らん」と云ふから、光氏は兩將に其由を復命した。右衛門助
 義助は、進退谷り無言であつたが、越後守義顯曰く「淨慶の申す處も理あれど
 今ま迄で附き従ふたる忠節なる士卒の志は、親子の關係よりも重かるべし、さ
 れば彼等が命に義顯代るとも、我命に士卒を替へ難し、光氏今ま一度其旨を傳
 へ、猶ほ難儀の模様あらば、我等も士卒も共に討死して、將の士を重する義を
 後世に傳へん」とのことに、光氏は又打ち返して其由を淨慶に申入れたが、淨
 慶は容易に聽き入れない。依て光氏は馬より下りて「天下の爲めに重かるべき
 大將の御身にてありながら、尙ほ軍勢の命に代らんとし給ふ、況や義によりて
 命を輕すべし士卒の身として、大將の御命に代らぬことやある、されば早や光
 氏が首を取りて、大將を通されよ」と將に自及せんとする有様なるに、淨慶は
 走り來つて、光氏が刀に取つき「實にも大將の仰せも、士卒の所存皆な理あり

淨慶如何なる罪科に當てられ候とも、いかでか情なき振舞をも爲し得べき、早
 速に通り行かれよ」と弓を伏せ道の傍に畏る、兩大將之を見て感ぜられ、後の
 しろしとして、射向けの袖にさしたる黄金作りの太刀を抜き、淨慶に與へられ
 た。之は光氏が大將の急を見て命に代らんとし、淨慶は敵の義に感じて、後
 の罪科を顧みず、義を立てたと云ふ、義貞北國落ち美譚の一節であるが、北陸
 に於ける義貞の事蹟は、實に一種の悲壯なる詩篇の如きものである。金ヶ崎城
 は其後高尾張守高經、仁木兵部大輔賴草、今河駿河守賴貞等の攻むる處となる
 南朝皇子は遂に同處で自及された、現に敦賀灣頭の松籟濤聲、無韻の哀歌を奏
 して居るが、私は北陸地方を旅行し、杣山城址を経て、金崎宮に詣つたとき、
 皇軍振はすして陣歿された、將卒のことを追懷し、悲憤の情に堪えぬものがあ
 つた。

其六 主上吉野潛幸

(一)

主上は花山院の故宮に迎へられ、同處に御座あつたが、重祚の約束は偽りにて、御會心のことも絶えてなく、日夜宸襟を蕭颯たる寂莫の中に惱さる、霜に響く遠寺の鐘にも御枕を欹て、楓橋の夜の泊に御哀を副へられ、夜の大殿に入り玉ふても、夢より外の昔もなし、紫宸に星を列れし百司の老臣、参り仕つる人一人もなければ、天下のこと如何になりぬらんと、尋ね聞召さる便もなく、逆臣尊氏に犯され奉つたことのみ遺憾とされて居つた。

當時伊勢の國にありける、北畠顯家卿の御舍弟顯信朝臣、官軍の爲め再び舉兵する由、帝の叡聞に達しければ、夫れに御力を得て、同年十二月二十一日の夜半ばかりに、主上は三種の神器をば、新勾當内侍に持たせられて、童部の蹈みあげたる築地の崩より、女房の姿にて忍び花山院殿を出でさせ給ふ。刑部大輔大江景繁、寮の御馬を奉り、三種の御神器をば自から荷負ふて、翌二十二日

大和四山永久寺に入る。次で帝の一行は河内國に正成といひしが、一族共を召し具して、吉野へ入らせ給ひぬと正統記は記して居る、同書は南期の柱石、北畠親房卿の著に係るもの、最も信用するに足るべきである。當時楠木一族は河内東條城にあり、客將四條隆邦、一族橋本正茂等と軍勢を集合し、帝の一行を迎ひ奉り、やがて沿道を警衛吉野へ入つた、帝への供奉は、四條隆資、洞院實世、堀河光繼等なりと正統記は記して居る。

主上吉野加名生の里堀氏の館に入り、次で吉野の衆に迎へられ、延元二年春二月吉水院に入御、吉水院主法印宗信、同山金輪寺を以て行在となし、僧兵三百人甲冑を帶して急に備ふ。

夫れより吉野朝廷は諸國に綸旨を下し、誠忠の百官是れに昇殿し、正統の政を立て給ふ、世に之れを南朝と稱し、京都に於て足利幕府のたてたる、光明帝政府を北朝と稱し奉る、是より兩朝に仕ふる武士の合戦暫くも止むときなし。特に注目すべきは、當時南朝の諸公卿が、數度の戦歴に、自から用兵の術を解

し、今まや北朝の有力なる武將に對し、軍の指揮に遜色なきやうの傾向を來したることである。公卿にして實戰場に大活動を爲すものが出來た。

(二)

延元二年正月、北朝は新田一族を金ヶ崎城に攻めしむべく、侍大將高師泰、守護尾張高經、仁木賴章、細川賴春、今川賴貞、荒川、小笠原、佐々木等の連合軍を催し、同城を包圍させた。

同時南朝は北畠親房卿、將に頼齡たらんとして尙ほ皇事に奔走し倦まず。總參謀長の要職にあつて、軍事を督勵して居る。而して鎮守府將軍北畠顯家に勅書並に白河城主結城宗廣に綸旨を賜ふて、奥軍の西上を促し、出來得べくんげ鎮西にある、菊池、阿蘇の軍勢をも集注せしめ、吉野軍を中心とし、東西の精兵を以て、足利勢と一大會戦を試まむと計畫された。

延元二年四月のことである、足利尊氏使者を楠木城に立て、正行宛てに光嚴

帝の綸旨並に教書を添えて、若し吉野の主上を押し籠め奉り、之れより以後北朝に參勤せば、正行を紀伊、河内、大和、攝津、和泉五ヶ國の守護職に恩補すべき旨を申された。楠木城にては該使者を得たから、楠木正家、和田正遠、恩地滿一等を始め、宿將評定の上「宣旨御教書謹みて承る、正行は幼者、後室は女性なり。將軍に對し今日何等私事恩怨を有するものにあらずと雖、主上此地に臨幸あつて、皇居を駐め給ふに、臣として何ぞ情なく君を押し籠め奉るの思をなすを得んや。吾等は若し將軍家より追伐使下らば、有り合ふ處の郎黨家人、心を一にして幼主正行と共に屍を軍門に晒し、王事に盡さんとするまでに候」と使者を歸した、當時の武士思潮は、必ずしも吉野朝廷に參勤せぬを以て不忠とは解してをらなかつたやうに思ふ、何故なれば武士には總棟梁たるべき將軍を頂き、將軍に盡すを何により、忠節であると云ふ思想が、深く武士氣質の中に、侵み込んでゐたからである。特に北朝には人氣者の尊氏がある、政治家直義がある、上に持明院統の光明帝を奉じて、諸國諸將の心を收攬したのだ

から、當時の諸將は多く其の花々しき、絢爛の政策に眩惑してしまつた。而して最初から吉野帝に附隨したるものには、尊氏との感情或は源氏黨に對する平氏黨と云ふ色分けもあつた、又た尊氏を本據とした武家方は、東奥の斯波家長、安藝の武田信武、南海の細川黨、九州の少貳、大友、島津の三守護等、何れも源氏の支流で、鎌倉幕府の恩恵に感泣して居る連中である。

特に一方宮方と稱する官軍は、新田義貞は源氏の出身なれど、鎌倉幕府から嫌忌されて居つた者、楠木正成は橘氏の出で源氏には關係なし、陸奥鎮守府長官北畠顯家は、後醍醐帝三腹臣の一人たる、准三后親房卿の長子息であり、結城宗廣は藤原氏の出で、九州の菊池武敏、阿蘇惟直、原田、松浦、肝付等は、嘗て平氏の殘黨、或は鎌倉幕府の怒りに觸れた連中である、依て此處にも圖らず源平對抗の色彩を二分し得た譯である。

就中大義名分の念地に落ち、兩朝附隨の武士互に相向背あるをや。之れ決して深き信念に立脚して居らぬ證據である。然るにも拘らず、楠木城にあつた諸

將は、評定の結果正成が紀信の忠に比したる遺訓に基き、勸降の使者を歸して吉野主上の爲め屍を軍門に晒すの覺悟を示したのは、最も會心事である、特筆すべき美事である。

(三)

延元三年正月、北畠顯家卿の奥州軍は、相州鎌倉を出發、途中海道筋にて各處に足利方の軍勢と會戦し、日を経て伊勢路より河内に入り、三月八日軍を攝津天王寺に進め、幕府方の大將細川顯氏の軍と戦ひ、大に是れを破り、敗走せしめた。楠木正行は此間年僅に十三歳を出でず、一族和田正興等と吉野の皇居に到れば、主上正行を觀覽あつて仰に曰く「先年見しよりも成人しける者哉、汝が父判官が忠戰諫言せしことも、今更新らしく思ひ出すなり。汝武略を呈して今又朕を佐く、二代の忠深くして其の賞を知らず」と、正行も主上も共に暗涙に咽び給ふの狀を三楠實録は記して居る、正行は當時多く和田一族に輔

けられ、河泉の兵を以て足利勢に當る、官は當時左衛門少尉であつた。

北朝は幕府の細川勢、北畠の奥軍と戦ひ天王寺に大敗したと云ふ注進を得たから、更に執事高師直を總大將とし、舍弟同苗師冬、上杉重能、同憲藤、今川大友、島津等の軍勢を遣し、八幡、天王寺の官軍に當らしめた。足利方八幡口の大將武田信武は、楠木一族の爲め天王寺に大敗して以來、八幡を固守し、大友、島津の援軍來ると共に、洞が峰に春日顯信の軍を破る。顯信は北畠親房卿の第二子で、當時最も有力なる一軍團を率ゐて居つた、楠木一族和田正遠等同軍に従ふ。

一方高師直は天王寺口の總司令官として着陣した。細川勢に加ふるに上杉重能以下新手の軍勢を以てし、北畠の奥軍に當らしめた、兩軍合戦始まるや、血戦數十合白刃將に折るゝの頃、北畠軍遂に退却した。南朝は北畠軍の天王寺方面に於ける戦報を得て、援軍として西國の兵の東上を促した。菊池武重、阿蘇惟時等の軍勢、大友、少貳等の軍勢に支えられ發向するを得ず、荏苒する間に

奥軍の總司令官北畠顯家卿は、遂に阿部野原に戦死された、御年二十一才とある、名和義高、同義重並に部將南部師行等同合戦に討死した。

同時和田正興の軍勢は、河内高安に陣し、北畠軍に援軍して居つた。然るに境浦の合戦破れ、將軍阿部野に戦死されたから、足利勢高安に迫つて來た。正興即ち萱振の民家に火を放ち、寄手を逆撃し敗走さす。

五月二十五日吉野朝廷は、顯家卿の敗報を得たから、顯家卿の御從弟左近衛中將冷泉持定並に御舍弟春日顯國等を遣し、奥軍の援けとした。奥軍は部將結城宗廣等以下、將軍顯家卿の弔合戦なりと、全軍決死勇奮したから、意氣大に昂り、何なく男山を乗つ取り、八幡の洞が峯へ官軍の陣を敷く。

京都政府は再び敗報を得て、高師直兄弟、仁木義長、上杉重能、細川顯氏、今河範國、細川頼春、武田信武等の諸將をして、同處を攻めしめたが、南軍大に力戦し數日を経て未だ抜けず。斯かる形勢で吉野政府の南軍は成績良好となつた。依て再舉を圖るべく、北畠(春日)顯信卿を鎮守府將軍に補し、皇子義長

親王を奉じて、北畠親房卿、結城宗廣等と、伊勢より海路歸府の途に就かるることになり、安濃津から乗船されたが、海上風波の爲め目的地に到着するを得ず、北畠親房卿等の船は常陸に吹きつけられ、關民部大輔宗祐が關城に入り、結城宗廣等の船は伊勢吹上に吹きつけられて光明寺に入り、同處に病を得て宗廣歿し、奥州計略の大計畫は全く水泡に期してしまつたのである。

(四)

南朝にては御事を擧げ給ふ以來の功臣、次第に討死或は病の爲めに死亡し、内裏も昔日の觀なし。主上には或る日寂寥の御惱みにや堪えざりけむ。こととはんひとさへまれになりけりわかよのすぬのほとしのしらるると御製を遊さる、御宸襟の程拜察し奉るも涙の種である。斯くて延元四年八月に至り、吉野の主上御不豫の御事あり、典藥頭御脈を拜し已に音ならざる旨執奏す。

太平記には、玉體日々に消えて、晏駕の期遠からじと見え給ひければ、大塔忠雲僧正御枕邊に近づき奉る。主上最期の一念なりとて、遺詔を賜へ、左の御手に法華經を、右の御手に御劍を接し、八月十六日丑の刻に、遂に崩御あらせ給ふとしてある。

御遺詔御遺志の程は、陛下崩御の前日、即ち八月十五日附を以て、勘解由次官五條頼元宛、征西府に下賜せられたるものにより、拜承することが出来る。自去比依有御惱事御讓國于陸奥親王義良親王了不違日來之軍思可達。御旨縱雖有不慮御事深被憑思召候上者令勇官軍等殊可廻朝敵追罰之籌策於當山云要害云祇候輩更不可有子細存其旨可令下知軍勢給者天氣如此仍執達如件

謹上

左中將實躬
(央徵墨實)

主上崩御後は、多年附隨し奉つた、卿相中の生存者にも、各々隠れ處を求め退散する者あり、吉野朝廷は多少の動搖と寂寞とを免れなかつた。

然るに吉野執行吉水法印宗信、急ぎ参内して皇太子の即位並に朝敵追伐の遺勅を奉すべき旨執奏した。當時南朝方の武士としては、新田左兵衛佐義興上野にあり、家嫡左少將新田義宗武藏にあり、脇屋刑部卿義助、同左衛門佐義治等宗徒の一族越後地方にあり。其他九州、中國、四國、畿内、東奥地方にも忠勤を抽んづる武士多きに付「何様先づ御遺勅に任せて、繼體の君を御位に即け進らすやう、國々へ論旨成し下され候へかし」と述ぶ。

折から、楠木正行、和田正朝等二千餘騎にて馳せ來り、皇居を守護し奉る、主上崩御と共に、吉野朝廷動搖し、朝憲日々に衰ふ。正行神明の照鑒加護によりて皇威を恢復し奉らんと、まづ仁王經を書寫して御陵に納め「いはしみづきよきながれのたいせすはむかしにかへせきみのみよなは」と祈願を込む。當時の願文は正行自から記す處と傳ふ。

今度仁王經法施し奉る旨趣者

先帝崩し給ひしより、日毎に朝憲おとろへ、怡水の卑につき或は氷上に太陽

の臨むがごとし、臣等

主上のおゝむために、しばく龍鬚を撫し、虎尾を踐むで冷冒すと雖、まぬかれむと欲せず、しかばあれ今朝かくおとろへさせ給ふうへは、人力の及ぶ處にあらざれば、謹で此聖經を書寫し、永く寶前に納め奉り

神明の照鑒によりて天下泰平ならしめ

宸襟を安んじ奉らむ事をれがふもの也

當時吉野朝廷の動搖せるさま推想するに餘りあり。延元四年十月三日、南朝は皇太子義良親王即位あらせられ翌年興國と改元、左大臣藤原經忠、右大臣洞院實世、大納言四條隆資等陛下に奉侍す、即ち後村上帝にあらせらる。

其七 四條畷合戦

(一)

後村上天皇の興國年間及び正平元年は、南北兩朝附隨兩軍の合戦に暮れた。次で正平二年關東關西より官軍競ひ起り、捷報荐りに吉野朝廷に到る。

楠木正行當時年二十二歳、帶刀左衛門尉にして河内守を兼ね、父正成が先年湊川へ下りし時、汝は河内へ歸りて君の如何にもならせ給はんずる、御様を見て進らせよと申含めしかば、其庭訓を忘れず、如何にもして父の敵を滅し、君の御憤を休め奉らんと、明暮肺肝を苦めてぞ思ひける其の甲斐ありて、河内東條城を根據とし、吉野に於ける官軍と謀を通じ、八月十日紀伊、熊野の勢を以て、和田助氏等と隅田城(紀伊)に北軍を攻め、次で天王寺、住吉方面へ出陣した。

(二)

京都政府は、河内方面の戦況を得て、味方敗軍せることを知り恟擾す。楠木正行は、葛井寺方面の合戦に、勝利を得て以來、軍容更に振肅し邊境の敵軍を

侵すことになつた、又同合戦の戦功により昇殿をも許されたと太平記に記してある。昇殿は藏人なれば六位なれど、其他にありては、四位以上でなくば許されない。當時正行は帶刀左衛門尉にして河内守とあれば、恐らくは五位であつたらうが、戦功により禁中昇殿は初めて特許されたものと思ふ。

當時官軍は常陸の關城落ち北畠親房等、同處より再び吉野朝廷に入り、四條隆資軍事を總督し、楠木正行は河泉紀和の諸軍を司令して居つた。此の間東北には陸奥鎮守府の長官北畠顯信卿、諸軍を指揮して、探題吉良貞家等の軍勢と靈山、宇津峰等に會戦し、關西にては征西府の阿蘇惟澄、菊池武宗等、少貳頼尙、大友、鳥津の軍勢と合戦し、互に興敗あれど、大體に於て吉野朝廷の諸軍優勢で、各地より捷報を齎すの好機であつた。

同時室町幕府は、將軍尊氏、舍弟左兵衛督直義以下の軍評定があつた。畿内の官軍中々強くして、味方大敗せり、加ふるに東西の諸國、官軍再び蜂起して京都市街は其の間者の放火により、屢々火災に罹ると云ふ有様である。依て諸

將評議の結果、まづ河内の楠木一族をば退治すべしとて、諸國の軍勢を催促發向せしむることになつた。

楠木勢討手の軍兵は、二軍に編成された。一は高越後守師泰の率ゆる軍勢で相従ふ人々は、逸見孫六入道、武田甲斐守盛信、厚東駿河守武實、赤松信濃守範資等、二萬餘騎である。軍は十二月十一日京師を立つて、河内東條城に向ふべく、同十四日夜淀に着陣した。

次は高武藏守師直の司令する大軍團である。相従ふ人々は細川阿波將監清氏、仁木左京太夫頼章、今川五郎入道範國、武田伊豆守信武、高刑部大輔師兼、南遠江守宗繼、佐々木佐渡判官入道秀綱以下、多田院御家人、源氏外様計四百餘人、總軍勢六萬餘騎である。同軍勢は越後守の率ゆる第一軍に後るゝこと數日十二月二十六日拂曉に京師を發足し、男山に着陣した。依て淀を本陣とせる第一軍は、赤井、大渡に、又た男山を本陣とせし第二軍は、八幡、山崎より櫻井水無瀬の村落に舍營した。

吉野朝廷は、室町勢大舉し來る旨、偵知したから早く既に河泉の軍を以て、攝津渡邊に防戦さすべく計畫された。同時國人には此度の合戦は大事の合戦なれば、所持の楯を盡して來れ、不足は適宜補給すべければ、勇者は遅々する勿れど意味の訓令を下された。

楠木正行斯くと知りつゝ、十二月二十七日舍弟正時以下一族と吉野の皇居に參内し、四條中納言隆資卿を経て、後村上帝に奏上する處があつた、太平記に曰く『正行、正時已に壯年に及び候ぬ。此度彼と手を碎き合戦仕候はずば。且は亡父の申し遺言に違ひ、且は武略のいふかひなき謗に落ちべく覺候、有侍の身思ふに任せぬ習ひにて、病に犯され早世仕る事候へなば、只君の御爲には不忠の身となり、父のためには不幸の子となるべきにて候間、今度師直、師泰に懸合ひ、身合を盡して合戦仕り、彼等が頭を正行が手にかけて取り候ふか、正行、正時の首を彼等に取りられ候ふか、其二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今ま一度君の龍顏を拜し奉らんために參内仕りて候』と上す。

義心身外に溢る、眞に國家の柱石である、予は本文を讀む毎に、常に肉躍るの感あるものである。

奏聞に達した本文中『若しも病に犯され早世仕る』こと云々は、正行は父正成と異り、蒲柳の質であつたと、三楠實録にもあるから、自から心配して居つたものと覺ゆ。

因に本記事に就ては博士星野恒氏等、事實無根であると否定して居るが、予は未だ俄かに抹削すべきでないと思ふ。

(一)

四條卿は正行が上奏を叡聞に達す、主上即ち南殿に出御あり、玉顔殊に麗しく正行に謁を給ひ『以前兩度の合戦に、勝つことを得て、敵軍の氣を屈せしむ叡慮先づ憤を慰する條、累代の武功返すくも神妙なり、朕汝を以て股肱とす慎で命を全うすべし』と勅言を賜ふ。正行感泣のあまり頭を地につけたるまゝ

暫時は天顔を拜することも得能はず、天皇の入御を待つて漸く退出した。

吉野院は南朝四代五十七年間の行宮なり。『こゝにても雲井のさくらさきにけりたかりそめのやどと思ひと』と、後醍醐帝が勾當の内侍に賜ふ處の、御製と傳ふるものを拜誦することに、予は暗涙の轉た禁じ難きものがある。

成島讓氏の南山史は『楠正行將發、先朝行在辭謁、又拜先皇塔尾山陵』と記して居る、正行吉野參内の状況である。

楠木正行、同舍弟正時、叔父楠木正家一族和田高家、和田賢秀以下決死の勇士等一百四十三人、北向の御陵に入らせ給ふ、先皇の御廟を拜し奉りて、今度の合戦味方難義ならば、一族殉忠致すべき旨念じて、如意輪寺の壁板に『あづさゆみ引きかへさしと思ふよりなきかづにゐるなをそとむる』と一首の和歌を書し、各鬢髪を切りて名殘の爲め佛殿に納め、其の日吉野を發足して、河内の歸途に就く。寄手は大将高師直、同舍弟師泰以下、大名軍勢何れも淀、八幡の陣中に越年し、正平三年正月二日高師泰の第一軍淀を發して天王寺に向ひ師

直の第二軍は河内佐々良に陣を敷いた。

吉野朝廷は、北畠親房に興良親王を奉ぜしめ、河内槇尾寺を本營とし和泉の軍勢を督して、師泰の第一軍に當らしめ、楠木が東條城の四條隆資をして、河内の軍勢を司令せしめ、師直が第二軍に當らしめた、楠木正行は同時往生院より佐々良に出陣した。往生院は中河内郡牧岡村で、佐々良は北河内郡四條暖南方である、寄手は天王寺に陣した第一軍堺手に進軍し、第二軍は正行の軍勢と會戦することになった、其の總勢約八萬騎と註す。

合戦の様子は太平記に、師直の軍は三軍五所に分れ、烏雲の陣をなして陰に設け陽に備ふとあり。大將高武藏守以下武田伊豆守、懸下野守等、飯盛山の南端より、生駒山、四條暖方面の各部署に就いた。

(三)

官軍は四條中納言隆資卿を御大將とし、其軍勢二萬餘人、四條暖方面へ進發

す、楠木正行の軍に應援せん爲めである。

正月五日寄手の軍勢、四條畑の率ゆる官軍と合戦に及ぶ間、楠木正行、同舍弟正時、和田高家、同賢秀等の精兵三千餘騎、敵の斥候を懸け散し、大將武藏守の本陣目掛けて突撃した。

大將武藏守の本陣は、一番に細川阿波將監清氏、五百餘騎にて相當る、楠木が三百騎に馳けたてられ引き退く。

二番に仁木左京太夫頼章、七百餘騎にて向ふ、三番千葉介氏胤、宇都宮の兩勢七百餘騎にて東西より相近づく。

楠木勢を双べて陣中に突入し、火花を散して相戦ふ、仁木、千葉、宇都宮の兵何れも敗北す、楠木が兵も數多討たれ、乗馬は矢三筋四筋負はぬものはい程である。

(四)

太平記には正行同一族今度の合戦には、高師直の首を得るか、己が首を敵に渡すか、運命の決する處なれば、落つべかりけるをも落ちず。田の畔にて胡麻の兵糧とり出し、心靜かに食事を了し、只師直に寄り合せて勝負を決せよと聲々に罵り呼ばり、武藏守の本陣へ徒歩にて突撃したとある。

寄手は細川讚岐守頼春、今川五郎入道、高刑部大輔師兼、高播磨守師冬、南遠江守宗繼以下七千餘騎にて支ふ。

一番南次郎左衛門尉、二番松田次郎左衛門尉、楠木勢の和田新發意賢秀が大

長刀にかけられ、馬より倒に落ちて討たる。

是を始めとして全軍總敗北し、淀八幡をさして引き退く。

楠木正行大將高師直の首級を得んこと必せり、先帝并に亡父正成同一族の靈をも弔し、兼れて吉野宮御座の主上にも面目ありと、喜び勇んで攻めたつ。

大將武藏守味方の軍勢、楠木の徒歩隊に敗れ、京八幡をさして引き退くを見るや、大音聲にて蓬し返せ敵は小勢なり、師直こゝにあり、見捨て、京へ逃け

たる人、何の面目ありてか將軍に謁見し得むと、齒嚙みをなして下知す。

斯かる内に、土岐周齊房、雜賀次郎等討死す、楠木勢高武藏守の本陣へ切り入りあはや楠木が多年の本望爰に遂げぬと見ゆ『斯かる處に上山六郎左衛門高元、八幡殿より以來、源家累代の執權として、武功天下にかくれなき、高武藏守師直是れにありと軍勢を指揮して暫時戦ふ程に楠木大和守正之(正時)大將師直よと見てければ、自餘の葉武者に目を懸けず、走り寄つてムズと組む、上山も力量普通に越えしかど正之や勝りけん、取つて壓て首を掻き落す(三浦實録)とあり。上山高元は總大將高師直の爲めに、身代りとなり討死したものだ、師直は有繫足利政府の執事程あつて、當時は士心をも得て居つた。武士——就中日本武士は多く意氣に感じて働く美風がある、上山高元等も太平記によれば全く師直の意氣に動かされ討死したものと見ゆ、得たきものは良部下である。

正行、同正時、上山高元が鎧を見るに、輪違の紋を金物に掘り透したり、さては仔細なき武藏守を討ちてけり、多年の本意今日己に達しぬ、是を見よや人、

々として、其首を中に投げ上げては請取り、請取りては手玉について悦びける、積年の快舉特に大将武藏守の首級と信じたる、正行兄弟にありては、全く斯くありけんと思はる。

楠木「師直の首級を太刀に指貫き、敵味方に誇り示さんとすれば師直にはあらず、上山六郎左衛門が首なりと申すに楠木大に腹立して此首を投げ、上山六郎左衛門と見るは僻目か、我が君の御爲めには無双の朝敵なれど、餘りに剛に見えつるか優しさに、自餘の首ともには混ぜまじきとて、着たる小袖の片袖を引き切りて、其首を押し裏み、岸の上にぞ指し置きたる」と太平記にはある。正行無念の程は同情に餘りあれど、敢て悪びれず、上山高元に對しての行爲と宏量とに、日本武士としての精華を見る、何となれば敵ながら上山なる武士は、主の言葉に感激し、能く自代りとなつて、討死したる勇士である。

(五)

次に太平記には師直未だ討たれず、輪違の旗押し立てて七八十騎にてあるにぞ楠木勢の鼻田彌次郎深手を負ひながらも、勇奮して其の陣所を突かんとす。

和田高家斯くと知るや、暫く思ふ慮あり、餘りに勇みかゝりて、大敵を討ち洩すな、敵は何れも馬武者なり、味方は徒歩なれば勝手悪し、吾等引き退く態に見せて、敵を誘ひ討たんこと如何と云ふ、何れも其の議然るべしとて、引き退く。

されど高師直は戰場に於ける老功者である、容易に楠木勢の退くを追はず、高播磨守師冬の手勢、退却する楠木勢を討ち取らんと、二百餘騎にて追撃す。楠木勢豫れて期したることなれば、追ひくる敵を誘ひて慘々に切りたつ、播磨守の軍勢瞬間に數多討たれ、本陣さして退却す。

四條畷合戦は、叙上の如く中々の激戦である、當時楠木勢多少の援軍あらば或は師直の首級をも得、正行が宿志の幾分を満すことも出来たか知らぬが、四條畑の率ゆる湯淺、芋瀬、中津川以下の軍勢も來り援けず。味方は益々苦戦の

状況に陥つたから、楠木兄弟、今は最期の決戦をなし、潔く討死するより外、なしと決心し突撃した。

當時高師直の本陣と、楠木との間は、僅か一町程であつたと傳ふ、されど寄手は高師兼、同師冬、南宗繼等の面々、大將師直を守護してゐるから、容易に近づき一騎討ちを試む機会がなかつた。それに楠木勢は其の日未明より開戦し午後四時に至る十一時間、前後三十餘合寄手の新手と激戦したから、身體既に疲労し息絶ゆる思ひあり、就中士卒深手淺手の負傷に、進退も自由でなかつた位であるが、決死の勇士楠木、和田、野田等吾れ先きに突進したから、一同是に續き寄手の大將師直も既に危く見ゆ。「然るに九州の強弓須々木四郎矢坪を定めて射ける程に楠木次郎正時眉間ふえのはづれ射られて、抜く程の氣力もなし。正行は左右の膝口三所、右の頬先左の目尻、篋深に射られて、其矢冬野の霧に伏したる如く、折れかゝりたれば、矢すくみに立ちてはたらかず」あはれ楠木一族今ま最期の期が来たのであつた。

此の間楠木の生存者僅に五十餘人、矢三筋四筋負はぬ者なし。依て正行舎弟正時を顧み、今まは是れまでなり。敵の手に懸るべからず、潔く自決するこそ好けれとて、陣中に各々刺し違ひ北枕に伏す。現に北河内郡甲可村小楠公墓地のある處が、戦死の場所となつて居る、正行時に年二十三歳である。

同時楠木敗兵は、部將和田藏人助氏の指揮により、河内東條城に入る。東條城は正行舎弟楠木正儀守備し、安間七郎兵衛餘一等が奇策を廻らして居つた。

和田藏人助氏は泉州金田郷を領し、和田將監助康の嫡出である、藏人は禁中の機密文書を司り、其他殿上のこと大小となく奉行する役である。

同合戦に戦死した楠木左近衛將監正家は、正成生存時代に常陸珂北爪連城に代官として赴任し、那珂通辰一族と共に、佐竹義篤の軍と合戦し、互に勝敗あつたが遂に爪連城陥り、那珂一族四十三人同處に捕斬された。正家は多分當時同地方の官軍、結城宗廣、廣橋常泰、何れかの軍に投じて、同處を逃れたものと推定される、而して河内に歸り、四條畷戦に最期を遂げた。同戦には正家子

息も戦死した、正家は予は正成の弟にて、正行、正時等の叔父に當る者と思考して居る。

又た大塚惟正は、赤坂村南の大塚村出の楠木一族である。和泉守護代として屢々足利軍を破つたことがある、正成湊河戦死の際は、自から敗兵を収めて河内に歸り、再舉を圖つた人である。

大手の合戦は正行一族討死したから、寄手の大捷となつた。されど搦手は高師泰軍勢を堺に出して居るか、北畠准后の司令する官軍中々強く、淡輪助重の淡輪城(泉州)攻圍され、援軍を求むれども、赴援することさへ出来ない有様であつた、處が楠木正行四條囃に敗死したと云ふ情報が河泉の官軍に傳はるや、一時意氣沮喪の氣味である。依て高師泰は其の機に於て、軍を河内東條に進め石川々原に壘を築き、正月十四日楠木正儀の東條軍と大に戦ふ、また一方高師直は楠木正行を討ち取たる勢を以て、軍を大和に進め平田莊に屯した。

吉野朝廷は正月二十四日冷泉前右府、後村上帝を奉じて、十津川より穴太に

入り、阿氏川入道の館に入御あらせらる、同處は後に賀名生行宮と稱し奉る處である。其の後石川々原に對陣の高師泰の軍は、數々楠木正儀等が東條勢と合戦し利を失ふ。楠木宿將安間七郎兵衛餘一は、石川々原に高駿河守師茂と戦へ是れを斃す、和泉金田卿領主和田藏人助兵衛楠木軍にあり數度忠節を抽つ。

高師直の軍は穴太皇居の背を衝かんとし、京極、武田、佐々木等の軍勢を以て進軍す。官軍眞木定觀、三輪西阿並に長谷寺の衆徒等來り援け、足利勢不利に陥り、京極秀宗戦死し佐々木道譽等負傷した。

斯くて南北兩朝附屬の武士は、合戦暫くも歌むときなく、世は益々亂れて來た。

其八 吉野の軍事的價值

(一)

南北朝時代は全国各地に南北所屬の武士が割據して居り、殆んど寧日なしと云ふ有様であつたから、到る處に於て戰鬪があつた。依て今ま一概に用兵上のことをも、評論すべき限りでないが、當時北朝は室町幕府の所在からして、京都が作戦の根據地となり、南朝は主上が吉野行宮に御座あつたから、同地を以て基地として居る。京都は四圍に連山あるを以て、極めて要害なる如く思はれるが、實は守り難い處であつて、京都に據つたものは、大半敗亡して居ると云ふ有様であるが、吉野は作戦上如何なる位地にあるか、之をお話するのも多少興味あることと思ふ。

南朝が何故に大本營を吉野に置かれたかは、古來専門家間に種々の話説が傳つて居るが、吉野は南都興福寺の末寺のある處であるから、主上は専ら僧兵の戰鬪力に依頼して、同地に駐紮されたものらしい。南朝の作戦計畫は、重に源親房卿の立てられたものである、親房卿は文武兼備の名將であつて、一族一家を擧げ皇軍の爲め、最後まで光燭を添えて居られた人である。南朝が特に僧兵

に據られたのは、當時三木一草と唱へられて居つた、楠木、名和、六條等の諸將相次で戦歿したると、官軍の總大將として盛名ありし、新田義貞が主上と尊氏との講和に嫌焉たらざるものあり、北國經略の途につかれたから、官軍は昔日の勢威がない、故に源親房の策を用ゐて、先づ武士と同程度なる戰鬪力を有す僧兵に依頼し、地の利を得て其處に朝廷を設け、四方勤王の軍を號令することになつたのである。主上は學問が好きであつた、隨つて高僧碩學を招き、講筵も度々開催され、比較的其方面に關係者を有して居つた。彼の元弘三年笠置潛幸の砌にも、密かに京都を出で玉ふて、奈良の東南院に入り、東南院僧正聖尋の案内にて笠置に赴かれたのである。

(二)

即ち元弘元年八月二十四日の夜半に、主上は鎌倉の北條高時專恣甚しく、遂に主上を無にし奉らんと、六波羅より討手を差し向ける由、大納言藤原公俊

から奏聞したので、主上は暫く大和に御潜幸あらせられたのである。當時の御消息は増鏡に「神璽寶劍ばかりをぞ忍びて以て渡らせ玉ふ、上(主上)はなよなる御直衣を奉まつり、北の對よりやつれたる女車のさまにて忍びて出てさせ玉ふ」としてある、該書は一條公冬公の撰述であつて、最も信據するに足る記録である、それから主上の供奉は、按察使大納言公俊、萬里小路中納言藤房、北畠中納言具行、四條中納言隆資卿等であつて、同夜の丑滿頃に木幡山を通過され、同處にて朝餉を取らせられ、夫れより大和路に入らせられる豫定であつたが、無斷にて該地へ行幸あるは如何あらんかとの儀も出で「いとむつけし、木津と云ふわたりに御馬とめて、東南院僧正のもとへ、御消息を遣はされた」のである。

東南院は南都の古刹であつて、僧正聖尋は鷹司基忠公の御子息である、依て早速其意を體し、御輿を奉つたから、南都に入らせられたが、南都は六波羅勢が警戒して居るので、長く同處に御滞在も出來ず、東南院には僅か一夜の御假

泊を賜ふたのみで、和東の郷に入り金胎寺に行幸あらせられた、金胎寺は山城國相樂郡和東郷にある、されど同處も行宮を設け玉ふには都合悪しく、次の二十七日笠置山笠置寺に行幸仰出されたのである、笠置寺は木津の清流奇岩を洗ひ、夏は綠蔭適翠、秋は滿山紅楓葉、實に山靜水明の佳境である。

同寺衆徒律師房快元は、主上の行幸を拜すや、山下まで御迎へに出で、本堂の傍に行宮を作り、而して御駐輦を願ひ奉つた、快元は東南院の通牒に基き、軍兵を催したのであつて、當時一山の宗務を司つて居つた者である。同時代は世の亂れが最も甚しい時であつたから、武士は何れも鎌倉の威勢に眩惑され、皇室の尊嚴を充分に解し得ぬものが多かつた、然し僧侶は有鑒に有識者が多い殊に貴顯の子弟にて、身を佛道に獻げ、三昧の妙締に自適し居る人が多かつたから、大義名分論等も其邊より起り、遂に皇軍の爲め忠勤を致されることになつたのである。古文書を調べて見ると、南朝と寺院とは、種々の意味に於て、深い關係を有して居られた、天臺宗は勿論のものである、座主に尊塔法親王があ

らせられたからにもよるが、其他に於ても京師の寺院は多く皇軍の味方であつた、依て笠置寺も其例に洩れず、又た吉野山の吉水院なども、同じく奈良の東南院聖尋僧正の懇懇にて奮起したのであつた。

(三)

さて皇軍の大本營たる吉野の地所は如何と云ふに、京都から南方伏見奈良を経て、紀伊川右岸にある上市迄約廿里、吉野は此上市の對岸にある。而して清き紀伊川は其前面を貫流して、天然の外濠を爲し、金剛葛城の峻嶺は、其支脈と共に、北方に對する自然の障壁を爲し、二の丸三の丸の任務を帯びて居る。東は吉野を以て其防禦區域を制限され、夫れより東は連山重疊して伊勢灣の海岸に達し、南は谷深くして山嶮しく、馳て高野山、十津川に通ずるものであるが、元より狹少の土地であるから大軍の行動は出来難い處である、唯だ西は紀伊川により開けて居るので、多少軍の行動と兵站輸送の便があるだけである。

以上の地形にあるから、吉野は大軍を收容することは出来ぬ、勿論攻勢を以て出動するだけの便もない、特には人巧を加へたる要塞のやうなものともなく、單に専守防禦の目的を有する地點たるに過ぎぬ、されば京都方面より之を攻撃するには、伊勢、紀伊の連絡を絶ち、正面より之を壓迫すべきであるが、伊勢と紀伊とは、吉野朝廷の軍の行動上策源地となつて居る、高武藏守師直は大軍を以て吉野攻めを爲したが、伊勢、紀伊方面と吉野の連絡を遮断し得なかつたから、遂に成功しなかつた。

吉野は餘り地形上有利な土地ではないが、南朝は五十有七年間、尙ほよく該地を保有し得たのは、南朝の大本營は同地にあつたが、比較的有力なる遊動部隊が、吉野以外の各地に存在したからである、其遊軍の戦況に就ては、或は時に勝敗あり絶對有利の戦況を齎したものでないが、其遊軍部隊が全く戦闘力を失はぬ間は、吉野は其遊動部隊の牽制により、常に安全を保有し得たのである。

(四)

南朝の中心人物は源親房卿である、彼は事実上の總參謀長であつて、又た首相として君側に侍した、地方に於ける遊動部隊の策應は皆な彼の指令に基たものである、即ち其子鎮守府將軍源顯家が、陸奥に下向して、専ら關東の軍事的策源地たる、鎌倉管領府を、背後から控制した如き、皆な親房の作戦であつて大局上有功なる行動であつた。又た其後に至つて、顯家の舍弟春日顯信及び結城、關等の人々が常陸方面に活動し、九州に於ても有力なる、菊池、阿蘇等の皇軍が、活動を續け得たのは、親房の方寸から出たものである。親房卿は餘り戦線に立ち、軍隊を指揮されたことはない、彼は帷幄の謀將であるが、彼の存在した時代は、南朝は一種の冒し難き權威を有して居つた、彼は戦亂の間にありても、猶ほよく常陸の小田城中に、神皇正統記を著し、南朝正統論を提唱した人で、後世の大義名分論に一道の光明を與へられて居つた、功績の偉大なる人

である。それから、吉野軍の爲め特記したいのは、楠木軍の行動である、先づ楠木軍は河内千早の要塞を以て根據地とし、攻勢防備の態度に出で、戰略上常に北軍を牽制して居たが、大本營直接の守備をも、重に楠木一族の任とする處であつた。主上が三種の神器を奉じて尊氏の毒手を遁れ、京師を出で玉ふや先づ聖駕を迎へ奉り、而して吉野に入ったのは正行である、又た主上劍を案じて憤慨の恨を呑み、行宮に崩じ玉ふや、群臣意氣沮喪して解散せんとした時、河内から駈けつけて、之を未然に防止し得たのは、正行が手兵二千餘騎を以て新帝(村上)に參勤した爲めである。

千早の要塞は吉野と、如何なる關係を有するかを尋ねるに、千早より南へ金剛山の分水嶺を超え、五條に於て紀伊川を渡り、南に折れて其左岸に沿ひ、下市を経て吉野に達することが出来る、其間道は峻険あれど僅かに七里である。大阪は沃野千里の平野にあり、此平野は淀川に依て京都に連つて居る、而して其平野は八尾より河内に入り、次第に狹少となつて来る、其谿谷の底下部に於

て、金剛山の中腹に築かれてあるのが千早の要塞である、正成が勤王軍を起したとき築た城であつて、楠木軍發祥の由緒あるものである。専門家の所説によれば、千早城は我が山地築城の白眉であつて、最も理想的に出来て居つたと云ふことである、由來山地築城の利とする處は、兵力の不足を補ふこと、專守防禦に應ずることである、而して其害とする處は、大兵を收容し得ざること、攻勢移轉の不便なることにある、山地築城と平地築城とは、全く其利害が相反對して居る、現今にては兵器の發達が著しいので、山地築城は何等有利とならなくなつた、要塞は別問題であるが、城としては寧ろ不便多きに苦しむ實狀であるが、然し往時にありては刀槍を以て唯一の武器としたので、劣勢の兵力を以て敵の大兵に對抗して之を牽制するには、山地築城が一番有利であつたのである。千早城の第一回總攻撃のあつたのは、元弘二年二月二十七日より、閏二月三日、四日を経て、五月十日に至る百餘日間であるが、北條軍は千早を以て官軍の根據地となし、使用し得べきだけの大部隊を出勤せしめ、最後まで全力

を傾倒して、我が國に於ける未曾有の大要塞戦を現出したのである、山地要塞は必ずしも同時代に始まつたものではないが、正成は築城及び要塞の防備に一革新新を爲したものである。

(五)

南北朝時代に至つては、此千早の城は十數個の枝城を有することとなり、各方面共に相策應じて防戦することになり、出撃運動の據點となつた、最初專守防禦の目的を以て築かれた千早城は、今や召集訓練修養の策源地となり、且つ吉野に對す大手の如き地位に立つたのである、依て北軍は南朝を覆滅すべき策戦計畫に於て、先づ敵軍主力の所在たる千早要塞を攻撃目標としたのは當然である。

千早の籠城軍は非常に奮闘した、楠木一族始め和田助家等の部將は、矢盡き刀は折れ、糧食乏しく飲水に渴しても、尙ほよく最後の第一人となるまで奮戦

した。由來歐洲の諸國に於ける要塞戦は、随分酷烈なる戦争を持続することがあるが、我が國の要塞戦は又た別である、軍律の如きも、軍隊建制の精神が異なつて居るから、西洋にては彈藥盡くるか、或は一方の奪取せられたる後に於て、城將が最善の防禦戦を試み、而も抵抗不可能と判断すれば、開城するのも場合により差支ないこととなつて居るが、我が國にては城を枕に討死するのが武士の最後の任務となつて居る。故に多くの歴史を繙いて見ても、我が國の合戦にては開城したる例は少ない、而して千早は最も能く防戦したる、我が國要塞守備戦の一事例とするに足るものである。

(90)

(六)

吉野の用兵上に關することを説けば、勢ひ吉野の大手たる、大阪方面の軍事的價值に言及せねばならぬ、而して北朝の所在地たる京都と、南軍の第一線たる攝河の地と對比すれば、其處に大阪の軍事上に於ける價值が明かとなつて来る

京都は三面疊々せる山を以て包圍されて居る、依て京都の糧食は常に瀬戸内海より淀川を通じて供給されて居る、大阪は船舶の出入に便利であるから、當時兵站基地となり、瀬戸内海及び淀河の水路は北軍の兵站線であつた。されば瀬戸内海の制海權と、大阪平野の占領とは、北軍の爲め是非とも必要とする處で、若し反對に南軍が大阪平原を占領することとなれば、直ちに京都の死命に關係を及ぼして来る。旭將軍義仲が京都に防戦したときも、軍需品の窮乏に苦しみ不本意ながら掠奪を敢行した、尊氏も京都攻撃に成功して、皇軍を叡山に壓迫したことが屢々ある、けれども何れも軍需の調達に苦心した、されば楠木は其弱點を知つて居るから、大阪平野に軍を出動せしめ、京都を威嚇し、北軍を驅逐した、故に南北兩軍の相遇戦は、數回此平原に行はれた、北軍が千早の強襲を爲した如きも、大阪平原にある兵站線を鞏固にする爲めであつた。彼の兵庫戦も南北兩軍の相遇戦であつた、大阪平原の領有が、如何に北軍にとりて重要であつたかは、北條軍が六波羅の主力、所謂八十萬の大軍を以て、千早を攻圍

(91)

したによつても知られる。同時北條氏は千早に向け大部隊を出動させたから、鎌倉及び京都は根據地が空虚となり、其爲め新田義貞に鎌倉を攻められ、足利尊氏等により六波羅は攻圍され、豪傑を極めた北條氏も敗死せればならぬ運命となつたのである。同時地方には新田義貞兄弟北國にあり、菊池武光等九州にあり、土居得能の一族は四國にあり、奥羽より常陸にかけては、北畠顯家、結城宗廣等の連合軍あり、兩毛信越方面は新田一族の根據地として、所在足利勢と合戦があつたが、之等は大局上枝戦であつて、本戦は矢張り吉野と京都との攻略に基いてた、攝河の合戦で、吉野も京都も、兵站基地は、常に大阪にあつたのだから、同地の奪略は軍事行動上、最も肝要事であり、屢々大部隊の衝突が同地に行はれた。例令ば楠氏が四天王寺戦も、小楠公の四條畷戦も、將た源顯家卿の戦死された、阿倍野の合戦も、何れも其間の意味を物語つて居るものではあるまいか。

其九 武士氣質と武裝

(一)

私は今ま我が武士氣質を少しく述べて見たいと思ふ、我が武士氣質は、『武士は喰はれど高楊子』の十七字に餘蘊なく現はれて居る、又た演劇千代萩に『死するを忠義と云ふことは何時の世よりの慣はしぞや』と云ふのがあるが、我が國民思想は、實に老女政岡の悲嘆中に、遺憾なく表現されて居る。南北朝時代には最も悲壯なる最期を遂げたものが少なくないが、就中吉野の合戦に於ける村上義光の忠死の如き、芳名千載に傳ふ可き壯烈なものである。太平記によれば『元弘三年正月十六日、二階堂出羽入道道瀧、六萬餘騎の勢にて大塔宮の籠らせ給へる吉野の城へ押し寄る、菜摘河の川淀より、城の方を見上ぐれば、嶺には白旗赤旗錦の旗、深山下風に吹きなびかされて、雲か花かとあやしまる。

麓には數千の官軍、兜の星をかゞやかし、鎧の袖を連れて、錦繡しける地の如し。峯高くして道ほそく、山嶮しうして昔滑なり、されば幾十萬騎の勢にて責むるとも、輒く落すべしとは見えざりけり。同十八日の卯の刻より、兩陣互に矢合して、入替へく攻め戦ふ、官軍は物馴れたる案内者共なれば、此處のつまり彼處の難所に走り散りて、攻め合せ開き合せ散々に射る。寄手は死生不知の阪東武士なれば、親十討るれども顧みず、主従滅ぶれども乗越えく攻め近づく。夜晝七日か間、息をもつかず相戦ふに、城中の勢三百餘人討れければ、寄手も八百餘人討れにけり」としてある。斯かる有様にて官軍は寄手の大軍に對し、防禦戦を爲し、大塔宮護良親王は、御自身にて赤地錦の直垂に、龍頭の冑の緒をしめ、戰場に立たれ、官軍を指揮されたが、吉野の兵は大手に吉野衆並に伊勢衆五百餘人、搦手に同一百五十人守備し居るのみにて、寄手は二階堂道蘊諸軍を司令し、其勢大手は五萬餘騎、搦手は新熊野岩菊丸、問道傳へに攻め來つたから、官軍は非常なる苦戦を爲し、宮の御鎧には矢七筋立ち、御腕に

負傷されたから、之を見たる村上彦四郎義光、鎧に立處の矢十六筋を折り懸けて、宮の御前に参りて「大手の一の木戸、いふがひなく攻破られつる間、二の木戸に支へて、數刻相戦ひ候ひつるも、敵既にかさに取り上げて、御方の氣は疲れ候ひぬれば、此城にて功を立てん事、今は叶はじと覺え候、未だ敵の勢を餘所へ廻し候はぬ前に、一方より打ち破りて、一先づ落ちて御覽あるべしと存候、但し跡に残り留りて、戦ふ兵なくば、御所の落させ給ふものなりと心得て敵いつくまでもつゞきて、追懸け進らせんと覺え候へば、恐ある事にて候へども、召されて候錦の御鎧直垂と、御物具とを下し賜りて、御諱の字を冒して敵を欺き御命に代り進らせ候はん」と言上した。然るに宮は「如何でかざる事あるべき、死なば一所にてこそ、兎も角もならぬ」と仰せられたが、義光詞を荒らかにして「かゝるあさましき御事や候」とて宮の御鎧の上帯を解き奉れば、宮げにもと思召しけん御物具直垂まで、脱ぎ替へさせ給ひて、「我若し生きたらば、汝が後生を弔ふべし、共に敵の手にかゝらば、冥途までも同じ巷に伴

ふべし』と仰せられて、御涙を流させ給ひながら、勝手の明神の御前を、南へ向ひて落させられたから、義光は二の木戸の高櫓にのぼり、遙に見送り奉り、宮の御後影の幽に隔らせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓はさまの板を切り落し、身をあらはにして、大音聲を揚げて名のりけるは『天照太神の御子孫、神武天皇より九十五代の帝、後醍醐天皇の第二皇子、一品兵部卿親王尊仁、逆臣のために亡され、恨を泉下に報ぜん爲め、只今自害する有様を見置きて、汝等が手本にせよ』と腹一文字に掻き切り、見事なる割腹を爲したとしてある。其時村上が子息兵衛藏人義隆も戦死した、其最期は誠に壯烈極まるもので、我が武士道の精華として傳ふるに足るものと傳へられてある、吉野を落ちさせられた、大塔宮は吉水院眞遍宮と共に、高野山に逃れ、同山の衆徒を語らひ再舉を期された。

當時大塔宮の令旨により奮起した、竹原八郎入道は、伊勢平氏の出であつて元久元年平賀朝雅の爲めに、平清盛一門の伊勢平氏が破れてからは、同地に潜

在せる平氏の殘黨は、機會あらは打つて出で、事を擧げんとして居つたのである。依て宮の令旨を拜するや忽ち軍兵を催し、自から大將軍として皇軍の爲め軍事行動に参加されたので、吉野に應援したのは、重に南伊勢即ち熊野方面の人々であつた。

(二)

又た赤城合戦のときのことであるが、寄手の大將阿曾彈正少弼治時は、軍令を發して、拔懸の功名を嚴禁した。現時の戦争にては、軍司令官の命令により枝隊長が出動命令を發しなければ、軍の行動は決して起さぬ、敵の優勢なるものに向つて、少数者が突撃するのは、反つて味方の爲め不利であるから、無論拔懸け等をするものはない、團體行動でなくば、殆んど近代の戦術には無効力となつて居るから、さる試みを爲すものは絶體に無いと云ふて可なりであるが鎌倉時代から南北朝頃にかけては随分とあつた。爰に武藏國の住人に、人見四

郎入道恩阿と云ふものがある、陣中にて本間九郎資貞に向ひ、「拙者不肖の身なれども、武恩を蒙りて齡已に七旬に餘れり、今日より後差したる思出もなき身の、そのろに長生して、老後の恨を遺さんよりは、明日の合戦に先懸して、一番に討死なし、武名を末代までも遺さんと存するなり」と語れば、本間資貞も心中には實にもと思ふたが、態と「枝葉の事を仰せらるものかな、之程の攻圍の軍に、先懸して討死したりとも、さして高名とは謂はれまじ」とば云ふたもの、人見入道は必ず明朝軍令を破つて先懸せらるゝに相違なしと思ふては心許して在陣するを得ず、夜半ばかりに密かに武装して、唯た一騎東條方面に進み、石川河原にて夜を明し、遙か朝霧の晴間より、南の方を見れば紺の唐綾威の鎧に白母衣懸けて、鹿毛なる馬に乗りたる武者一騎赤坂の城へ向ふ、さては何者ならんと馬打ち寄せて是を見れば、人見四郎入道である。人見本間を見つけていひけるは「昨夜宣ひし事を實と思ひなば、孫程の人に出拔れまじ」と打ち笑ひてぞ、頗に馬を早めた。本間跡につきて「今は互に先を争ひ申すに

及ばず、一所に戸をさらし、冥途までも同道申さんするぞよ」といひければ、人見「申にや及ばん」と返事して、跡になり先になり、物語して打ちけるが、赤坂の城近くなつたから、二人の者共馬の鼻を雙べてかけあがり、堀の際まで打ち寄せて、鎧踏み張り弓杖突きて、大音聲を揚げて名のりけるは「武藏國の住人に、人見四郎入道恩阿、年積りて七十三、相模國の住人本間九郎資貞、生年三十七、鎌倉を出でしより軍の先陣をかけて、戸を戰場に曝さんことを存じて相向へり。我と思はん人々は、出合ひて手なみの程を御覽ぜよ」と、聲々に呼はりて、城を睨みてひかへて居つた。城中の者共是を見ても「是ぞとよ坂東武者の風情かな、されど跡を見るに續く武者もなし、又さまで大名とも見えす、溢者の不敵武者に跳り合ひて、命失ひて何かせん、只置きて事の様を見よ」とて、東西鳴を靜めて返事もせなかつたから、本間木戸を切り落さんと近寄れば俄かに城中より鏑矢を雨の降る如くに射出したので、二人は遂に同處に討死してしまつた。其時戰場から、本間と人見入道との首級が天王寺の本陣に送り届

けられた、本間が子息の源内兵衛資忠一言をも出さず、只涙に咽で居られたが暫時して馬の肩に鞍を置き、唯だ一人打ち出でて、先づ上宮太子の御前に参り『今生の榮耀は、今日をかぎりの命なれば、祈る所にあらず、唯大悲の弘誓の誠あらば、父にて候ふ者の討死仕り候ひし、戦場の同じ苔の下に埋れて、九品安養の同臺に生るゝ身となさせ給へ』と、泣々祈念を凝して、泪と共に立ち出でたり。石の鳥居を過ぐると見れば。我父と共に討死しける、人見四郎入道が書きつけたる歌がある。是ぞ誠に後世までの物語に、留むべきことよと思ひければ。右の小指を食ひ切りて、其血を以て一首を側に書き添へて、赤坂の城へ向はれた、城近くなりぬる所にて、馬より下り弓を脇に挟みて、城戸を叩き『城中の人々に申すべき事あり』と呼ばれば、良暫くありて、兵二人櫓の小間より顔を指し出して『誰人にて御渡り候ふ』かと問ひければ『是は今朝此城に向ひて、打死して候ひつる、本間九郎資貞が嫡子、源内兵衛資忠と申す者にて候ふなり。人の親の子を憶ふあはれみ、心の闇に迷ふ習にて候間、共に討死せん

ことを悲みて、我に知らせずして、只一人討死しけるにて候、相伴ふ者なくて中有の途に迷ふらん。さこそと思ひやられ候へば、同じく討死仕りて、跡なきまで父に孝道を盡し候はばやと存じて、只一騎相向ひて候ふなり。城の大將に此由を申され候ひて、木戸を開かれ候へ、父が打死の所にて、同じく命を止めて、其望を達し候はん』と懇懇に事を請ひ、泪に咽びてぞ立つて居た。一の木戸を堅めたる兵五十餘人、其志孝行にして、相向ふ處やさしく哀なるを感じて則ち木戸を開き、逆木を引きのけしかば、資忠馬に打ち乗り、城中へかけ入りて、五十餘人の敵と火花を散して切り合ひ、遂に父が討たれし跡にて、太刀を口に呀へてうつぶしに倒れて、貫かれて戦死してしまつた。惜哉父の資貞は、無雙の弓矢取にて、國のために要須たり、又子息資忠は、ためしなき忠孝の勇士にて家のために榮名あり、人見は年老傾きぬれども、義を知りて命を思ふこと時と共に消息す、此三人同時に討死しぬと聞えければ、知るも知らぬもおしなべて、歎かぬ人はなかりけり』としてある。斯くて先懸の兵ども、ぬけぬ

けに赤坂の城へ向ひ、討死するよし披露があつたから、大將阿曾治時即ち天王寺を打ち立ちて馳せ向ひけるが、上宮太子の御前にて馬より下り、石の鳥居を見給へば左の柱に『花さかぬ老木のさくら朽ちぬともその名は苔の下にかくれし』と一首の歌を書き其次に武藏國の住人、人見四郎恩阿、生年七十三歳、正慶二年二月二日、赤坂城へ向ふて、武恩を報ぜん爲めに、討死仕り畢りぬと記してある。又た右の柱を見れば『まてしげし子を思ふ闇にまよふらん六のちまたの道しるべせん』と書き、相模國住人本間九郎資貞嫡子、源内兵衛資忠生年十八歳、正慶二年仲春二日、父が死骸を枕にして、戰場に命を止め畢りぬと認めてある、父子の恩義君臣の忠貞、此二首の歌に顯れて、骨は化して黄壤一推の下に朽ちぬれど、名は留まりて青雲九天の上に高しと、小島法師は、推獎して居るが、我が固有の武士道は實に悲壯にも又た優美なものであつた。

(三)

それから當時の武裝は、美々しくも晴やかなるものである、侍大將長崎四郎左衛門が赤坂攻めの行粧は、先づ旗差、其次に逞しき馬に厚綿懸けて、一様に鎧着たる兵八百騎、二町ばかり先立て、馬を靜めて打たせた。而して大將は其次に額纏の鎧直垂に、精好の大口を張らせ、紫下濃の鎧に、白星の五枚甲に、八龍を金にて打ちて着けたるを、猪頭に着なし、銀の磨着の臙當に、金作の太刀二振帶きて、一部黒とて、五尺三寸ありける坂東一の名馬に、鹽干湯の捨小舟を、金貝に磨りたる鞍を置きて、山吹色の厚總懸けて、三十六差したる白磨の銀筈の大黒の矢に、本滋藤の弓の眞中握りて、小路を狭しと歩ませた。片小手に腹當して、諸具足したる中間五百餘人、二行に列を引き、馬の前後に隨ひて、閑に路次をぞ歩む、後四五町引きさがりて、思ひくゝに裝ひたる兵十萬餘騎、甲の星を輝かし、鎧の袖を重ねて、沓の子を打ちたるが如くに、道五六里が程支へ、其勢は決然として、天地を響し山川を動すばかりである。此外外様の大名五千騎三千騎、引きわけく晝夜十三日まで、引きも切らでぞ向ふ、

我朝は申すに及ばず、唐土、天竺、太元にも珍らしき行装だとしてある、太平記は多少誇張的の紀文なきにあらざれど、先づ以つて當時進軍の状を想見すべきである。

西洋人は日本武士の辭世と、沈着なる行装とに感服して居る、日本武士は如何なる場合と雖も、一糸素れず詩歌を吟じ、徐に死に就かれる、之れ全く武士的修養によるものとしてあるが、我が固有の武士氣質に至つては、實に健羨すべきものが多々あるやうである。

其十 兩朝の人物

(一)

私は本稿を結ぶに際し、兩朝時代の人物に就て一言したいと思ふ、尤も本稿に於ては重に戰爭に關係せる武士のことを説き、公卿の人物は成るだけ避けた

いと思ふ。

北島顯房卿は、南朝の柱石であり、軍事上の識見も抱負も、將た作戰計畫も實に見る可きもの多く、常陸小田城中にて正統記を著述され、正統論の創首者となられた如き、實に第一流の人物たるを失はぬ、彼れあるにより南朝の軍事上に關する行動又は政治的生命は、常に泰山の安きを待たのである。

それから新田義貞は、皇軍の總司令官として、屢々軍忠を抽で、居る人であるが、この人も政治家ではなかつたけれど、武將としては誠に第一流の好將軍である、勇あり智あり、謀略あり、眞に典型的の將軍である、海道下りの合戦の際、足利の追撃兵に對し、橋梁を残して居いた美談等は、世間に知悉されて居ることであるが、彼の播磨國白旗城に石橋和義を攻圍したとき、官軍の兵多くして糧秣に缺乏を感じて來た、依て諸卒或は狼籍を爲し、良民を苦しむやうなことがあつてはならぬと、一粒の米麥と雖も徵發を許さず、民屋の一をも追捕したらんには、速かに之を許すべしと高札を以て一般に振れ知らした。され

ば農民は其堵に安んじ農耕に従事し、商人は賣買に精勵すると云ふ有様で、眞に好將軍ぞと唱はれたが、或日小山田高家敵陣の近隣に行き、青麥を刈り取つて乗鞍に負はせ歸つて來ると、當時の侍所長濱六郎左衛門尉之を見て、高家を招き種々吟味に及び、法なれば法の權威を示す爲め、誅伐すべしとあつた、義貞之を聞き、使者を遣はし、小山田の陣を調査せしむれば、食物の類一粒もない、使者その由を復命したから、義貞大に恥らひ、高家が法を犯すに至りしは戰の爲めとは謂ひ其罪科忘れ難かるべし、然し何様士卒に先んじて疲れしめたるは大將の恥なり、勇士を斯かることにより失ふ可からずと、麥の主には小袖二重を與へ、高家には別に兵糧十石を添へ、色代して遣はされたとしてある、依て義貞の部下は皆な彼の德に敬服して居つたのである、彼は不幸にして越前藤島の役に陣没したが、我が戦史上の一流の名將である、彼の鎌倉を一舉に屠つた攻撃戰の作戰計畫等も、極めて鮮かなる成功を収めたものである。

(二)

正成の人物に就ては、古來種々の説を爲すものがあるが、之を綜合するに、彼の性質は執拗であつた、固着であつた、剛情であつた、忠臣とか烈士とかは多く此種の性格の人が多いやうであるが、彼は忌憚なく直言するなれば、實に變人であつたやうに思はれる。而して武將としては義貞程でなく、全國の諸將を控制し、人心を收攬する手腕に至つては遠く足利尊氏に及ばんが、沈勇にして知謀あり、溫良にして恭儉なりし點に至つては、實に獨歩の特色を有して居るものと言はればならぬ、之れ寧ろ風雲に乗じて事を成す快男兒でなく、清節自ら潔しとする正義の高士である。依て楠氏は湊川に戦利ありとするも、大將軍となり、天下に號令すべき程ヤマ氣ある人物ではなかつた。又た正行は忠孝兩全の士であるが、蒲柳の質であつたのは遺憾である、正行の行動に就ては、叔父正家及び宿將等の、助成が與つて大に力あるやうに思はれる。

北朝方の中心人物は何と云ふても足利尊氏である、この人は自己の野心を満たす爲めに、正天子に向つて弓を引たので、其罪元より免るべからざるものであるが、人物としては同時代中最も大きかつたやうに思はれる。足利氏は新田氏と祖先を同じ、源氏の嫡流鎌倉の名門であるけれど、久しく怨を呑んで平家の餘流、北條氏の下風に立つて居つたのである、依て常に奮起すべく機会を窺ふて居つたのであるが、先祖義兼以來七代の間、北條氏の願使に盲従して居り、尊氏に至り、始めて宿積の望を達すべく、赤坂攻めとして京都に登り、同處にて官軍に降り赤松圓心等の連合軍と六波羅を攻め陥し、建武中興の偉業を翼賛したのであつた。然し程なく公武の政争を起し、遂に王朝に不平なる武士を率ゐ、鎌倉に下つて源頼朝の故智を倣ひ、政權を自からせんと、大覺寺派に對し持明院派を擁立したのであるが、尊氏は何れかと云へば温厚の長者であつて、怨少く恩を施す事が厚かつた、故に將軍としては好將軍であつたに相違ない、當時の武士は皆な喜んで彼の爲めに犬馬の勞を敢てし、身命を省みず盡す

處があつた、特に怨敵たりとも歸服する輩は、本領を安堵せしめ、功を致さんものは、殊更に莫大なる賞を行はるべきなりと施政方針を示し、功勞あるものには充分に行賞したから、足利の配下には、比較的大諸侯多く、山名氏の如きは和泉紀伊隱岐出雲美作山城若狹丹後伯耆但馬等を同一族にて領し、實に天下の六分一を領有し、六分一氏と云はれた程であつた。

尊氏は北條一門の赤橋氏と姻戚關係を有して居つた、故に北條軍笠置攻めの際、北條一族の大佛陸奥守貞直等と共に攻撃軍として進發し、京都攻めには名越尾張守高家等と行動を共にする程に北條氏から重用されて居つた、而して建武中興に際しても、公卿方にては大塔宮護良親王、武家方にては足利尊氏が功臣の第一に推され、源顯家卿が從三位に叙されると同時に彼も從三位の位記を拜した程である。彼は常に大局を總覽したが、小局は各其長所あるものを拔擢任用した、依て彼の事業は、凡て弟直義の畫策經營に出たものが多く、彼の事業には善惡共に、弟直義と執事高師直の計畫が包含されて居らぬものはない、

弟直義は智勇兼備であつて、餘り名は喧傳されぬが、當時下御所と尊敬されて居つた、就中行政的手腕の超凡なるものあり、室町幕府の施政は、彼の力に負ふ處が少なくない。

足利方の軍事は高兄弟が重に督勵して居つた、高は高階家であつて、素と文章學問を以て立たれた家柄であるが、上杉重能と共に足利方の帷幄に參畫し、師直、師泰の名は足利軍中に一種の權威を以て迎へられるに至つた、室町幕府が建設されたときも、武藏守師直は執事として、諸政の樞機を執り、越後守師泰は、侍所の長官として武士の進退に關する事務を取扱ふた、足利方の軍事に就ては、高兄弟の功勞は蓋し鮮少でなかつたのである。夢想國師は尊氏を評して仁慈の天性を以て人を惡みしことなし、度量寛宏末代にありがたき將軍なりとしてある、而して之を輔くるに策略に富み詐謀百出の直義あり、經綸の才に富める高師直あり、二者の才能と尊氏の宏量と相俟つて、足利氏の勢を爲すに至つたものと思はれる、單に武將としては、新田義貞は尊氏以上の點もあつた

か、總てを通じてる同時代の代表的人物を擧ぐれば、南朝に於ける北畠親房卿と足利尊氏とは、共に對立すべき大人物であつた。

【不許複製】

大正三年十二月五日印刷
大正三年十二月十日發行

【定價金拾錢】
【郵稅金貳錢】

著者 泉 俊 秀

發行者 岡 本 三 郎
大阪市東區北久太郎町四丁目五十一番地

印刷者 堀 越 幸
大阪市西區阿波座二番町一番地

大阪市東區北久太郎町四丁目

發行所 岡本偉業館

電話東二一八七番
振替大阪二九九一番

278
70

書叢サクイ

【第一編 ワイトルロー戦】 各冊

【定價金拾錢】

【郵税金貳錢】

【第二編 オルレアン戦】

【第三編 南北朝の合戦】

【第四編 パリー籠城戦】

終